

有俾なぞは何でもありません、大變軍服が濡れましたやうですから、サアど  
うぞ此方へ……今に火を起させます。」と下へも置かぬ待遇に兩個は宛然狐に  
魅まれたやうであつた。

實に小説のやうな話で、夫から兩個は奥へ通つて濡れた衣服を乾燥し、丁重  
な夕食の馳走に預かり夜更けて吾輩は自分の旅館に歸り、柴山君は松崎洋行に  
俵を飛ばした。

柴山君は車上から轉落したとき甲板時計に故障が生じなかつたのを非常に喜  
んで居た。

夫から吾輩が蘇州から歸つて見ると帝國軍艦某號が上海に溯航して居て、再  
び柴山君と相會し同君の知れる米國紳士を訪れ、得意のピヤノを弾いて主人夫  
妻を喜ばしたのが原因で、折柄來合して居た某國領事の令嬢に見初められた珍  
談があるが、吾輩茲に發表するのは見合せることにした。

(十七) 西湖十景

載生昌輪船局——新利洋行——大東汽船會社の三角航路——大小平領  
事の勤勉——上に天堂あり下に蘇杭あり——天下の絶景——門番の收  
賄——叩頭百拜した——官吏當然の役徳

蘇杭の間は南清の一大名所である。上海に來て此名所に立寄らないものは、  
共に南清を語るに足らないのだ。

吾輩は西湖の絶景に憧憬れん爲め、大東汽船會社に白岩龍平君を訪れた。是  
れ蘇杭の遍歴を終はるまで大東汽船會社の社船に便乗を乞はんが爲めであつ  
た。白岩君は吾輩の舉を壯なりと直ちに無賃便乗船を諾され、猶前途に多大  
の便宜を興へられた。吾輩は是より上海を發しまづ杭州に赴かんとするものだ  
が、發するに先だち吾輩は白岩君と大東汽船會社の關係を説かなければなら  
ぬ。現今でこそ上海蘇州杭州間の航運業を經營するものが澤山あるやうだが、

十四五年前までは官差と稱へて、僅かに南清官憲の用を便するに止まつて居たものだが、明治廿六年頃に載生昌輪船局が設立された。是は載生昌といふ男が創始したもので、最初の目的は主として上海と蘇杭の間を往復する官人の便を計り、傍ら民衆の交通運輸を便にしようといふのであつたが、日清戦後馬關條約に基いて、蘇杭の二市が互市場となるや、當時南清に放浪して秘かに風雲を狙ひつゝあつた白岩君は、渺たる一介の書生でありながら東西に奔走して、終に大東新利洋行を設立し上海蘇州間に汽船を浮べた、時に明治廿九年五月、當時上蘇の間を往復しつゝあつた載生昌、高記、人利其他數社の汽船と競争しなければならなかつた新利洋行は非常に苦しい羽目に陥つた、従つて白岩君の苦心は並大抵ではなかつた。就中載生昌輪船局は官憲の威光を笠に被て、非常に猛烈に競争した爲め、蘇杭開市と共に雨後の筈のやうに創立した會社は、悉く將棋仆れにバタ／＼と仆れてしまつた。而も白岩君の新利洋行は經營慘

憊、終に載生昌輪船局と對抗して勝利を占め、明治卅一年一月には上海杭州間の航路を開いた。當時南清の事情は漸く識者の注目する處となりかけたので、有力なる同志相計つて白岩君を援助し、茲に新利洋行は組織を變更して大東汽船會社となり、白岩君は其業務の主任として上海に居ることになつた。政府もまた同航路の必要を認めて、會社に航路補助金を下附することに同意したのは然るべき自然の數だ。白岩君の經營宜しきを得て、會社の基礎は大盤石のやうに固まつた。此に於て會社は更に蘇杭の間百廿哩の航路を開通した、時に明治卅四年四月、上蘇杭の三角航路は茲に目出度完成した、長江の水は濁つて居るが旭日旗の光輝は鮮だ、白岩君の得意思ふべし！

大東汽船會社の汽船は上海の碼頭を午後五時に離れる、吾輩は是に飛乗つて上海を後にした。汽船は黃浦江に入り、徐家匯、龍華鎮、長橋市を右舷に見、流を亂して溯航した。颯て夕陽蘆荻の間に隠れ、漠々たる兩岸の風物悉く紅

なる頃開口鎮を過ぎ、此處より針路を西に折つて閩行鎮を過ぎり、沙港市、得勝渡の人家を暮爾の彼方に見失ひ、松江府、婁縣の界に入り、浙江省嘉興府の嘉善縣に達するのだが、上海から嘉善縣迄西岸は大抵水田で、其間に介在する點々たる村落は盆景のやうに寂しげである。嘉善縣を發し秀水縣、塘匯鎮を過ぎ石門の淺洲を無事に越へて、石門灣を發し棲塘鎮を過ぎ、杭州城外の拱震橋に達するのだ。大東汽船會社の碼頭は拱震橋にある、吾輩は此處で上陸して會社の支店に遠藤君を訪れ一泊の厄介になつた。

翌日領事館を訪問し杭州の生産的狀態を訊くと、大小平領事は親切に自から調査されたる精密なる報告書の閱覽を許されたので非常に便宜を得た。全體領事なぞといふものの中には酒でも呑んで惰けてる人間が多いにも係らず、杭州領事大小平君の勤勉の如きは當世稀に見る處だ。俸給の申譯に提出す一片の義務的報告とは異り、大小平領事の調査報告には肉があり血があり精神があつた。

杭州は浙江の省城西南の大都で、明治廿八年馬關條約で開市された。錢塘江の北岸に位し、西は西湖に臨み、北は一帶の田園に連り、山水の明媚天下に絶す、支那人が此絶勝を誇つて上に天堂あり下に蘇杭ありと咄したのは、強ち無理とのみは言へないのだ。

杭州は春秋に越、後ち楚、始皇天下を統一してから秦漢は會稽郡に屬し、東漢吳郡に屬し、三國には吳の東安郡、晋に吳郡、陳に錢塘、隋に杭州、唐に餘杭、南宋此處に都して臨安と稱へた。宮殿樓閣輪奐の美を盡した南宋榮華の後は依然として繁榮を極め、清朝福建浙口二省の總督を設くるや、杭州は其駐劄地であつたが、開市後巡撫をして代らしめた。咸豐十一年長髮賊の亂に、杭城賊の爲めに陥され、同治三年迄兵燹相次ぎ、全都を擧げて悉く廢滅に歸したが、現今は大概舊觀を恢復して居る。

府城の東南は錢塘江に臨み、西は西湖に接し、西南には鳳凰山雲表に聳へ、

北は茫漠たる沃野千里一望際涯なし、城内は三區に劃たる、上城中城下城是なり、上城は人家稠密最も殷盛、中城是に次ぎ、下城は寂々寥々として戦餘の廢跡歴然たる有様だ。

古來西湖の美を中心として杭州は文人淵藪の地であつた。従つて風俗は清楚婉雅であるが、人は滔々として文弱に流れた。人情輕薄ならずと雖も、遊惰の民の多いには驚かざるを得ない。尤も錢塘江を界として江北諸府を浙西、江南諸府を浙東といふが、江を中界として東西兩浙の人情風俗は大に異つて居る、浙東に入つては浙西の溫雅を見ることは困難であるし、浙西に渡つては、福建氣質に似た浙東の剛毅朴訥は藥にしたくも求むることは絶対に不可能だ。

西湖は天下の絶景だ。彼のマルコポーロは西湖の美に驚いて、景趣宮殿の壯麗は世界一だと絶叫した。嘗つて錢塘の人陳青波西湖十景を畫いた。王郁十詩を題し、陳允平是に十詞を加へた。康熙三十八年時の帝親しく西湖に幸し、有司

に命じて十詞十題を石に刻して湖邊に建てしめた。湖山十景の名是に於てか定まつた。

蘇堤殘雪

孤山落月趁疏鐘、畫舫參差柳岸風、

鶯夢初醒人未起、金鴉飛上五雲來、

斷橋棧

望湖亭外半春山、跨水修梁影亦寒、

待泮痕邊分草綠、鶴駕碎玉啄欄干、

雷峰夕照

塔影初收白色暮、隔牆人語近甘園、

南山遊徧分歸路、半入錢塘半暗門、

院荷風

避暑人歸自冷泉、步○雲錦晚涼天、  
愛渠香陣隨人遠、行過高橋方買船、

平 湖 秋 月

萬頃寒光一夕舖、水輪行處片雲無、  
鷺峯遙度西風冷、桂子紛々點玉壺、

柳 浪 聞 鶯

如簧巧囀最高枝、弱枝新纏萬縷絲、  
翠風不來春又老、聲々訴與落花知、

花 港 觀 魚

斷泌惟餘舊姓傳、倚欄投餌說當年、  
沙鷗會見園興發、近日游人又玉泉、

南 屏 晚 鐘

凍水崖碑半綠苔、春日誰向此中來、  
晚煙深處蒲牢響、僧自城中應供回、

三 潭 印 月

塔邊分占宿湖船、寶鑑開奩水接天、  
橫笛吹雲何處起、波心驚覺老龍眠、

雨 峯 插 雲

浮屠對立磽崖嵬、積翠浮空霧靄迷、  
詠向鳳凰山一望、南高天近北烟低、

支那は文字の國である、好事者は各々勝手な名稱をつけては得意になつて居る。元末には錢塘十景と言ひ、雍正には西湖十八景が數へられたけれども、要之十八景といひ、三十六名蹟と號し、七十二勝といふも悉く唐人の寢言に過ぎない、生意氣に人間の癖に西湖自然の美を捉へて云矣するのは、蓋し美の神に

對して大なる借上沙汰であらう。

韓國の殺風景なる山河に飽き、没趣味なる北清の平野に愛想を盡かし、遠く南清に漂浪した吾輩は、西湖の絶景に憧憬れて、何だか胸中に詩の泉でも湧きさうに覺へた。

西湖は實に天下の絶勝なる哉！

領事館を辭し西湖の美にうたれて魂がぬけたやうな吾輩は、養蠶教師前田君を訪問したり、元來蘇杭の間は養蠶製糸の盛んな地方である。吾輩は大東汽船會社の汽船から、遠く兩岸の桑園を眺めて大に然るべきを豫想したが、果してさうだ。前田君は吾輩の爲めに南清の事情を説くこと頗る審かであつた。

翌朝前田君の養蠶學校を見、訣れて小舟を湖上に浮かべ杭州城外迄棹した。船を捨て、行くこと七八丁、一大富豪の門外に達す、嚴たること恰かも城廓の如く、日本の小大名で是程堂々たる城を構へたものはあるまい、吾輩は煉瓦

の高い圍壁を仰いで一種の好奇心に襲はれた。決矣旨くごまかして内部の状態を探検すべしと、刺を通じて門番に開門を促した。門番先生何か切りに辯りつけるが一向吾輩には通じない、併し其素振では開門取次を拒絶して居るらしい、此奴生意氣な奴だと鐵拳を握つて見せたが、平然として驚いた様子も見へない、果は吾輩を置去にして逃げださうとするから、愈々無禮千萬な奴だと追ひ絶つて豚尾の端をツカと握り、手真似で門を開かねば是だと、洋杖振上げて見せると笑つて居る、是に至つて大に手古摺らざるを得ない、ソコデ止むを得ずポケットから若干錢を出して握らせると、急に愛想能く門を開いて吾輩の來意を主人に取次いだ。世の中は鐵拳一點張でも歩けない、喰はずに利を以てする巧妙なる外交的手腕も時に取つての方便だと、轉んでもたいは起きぬ支那人の慾の皮の突張つてるのに驚きながら待つ程に、廳で案内された一室は壯麗目を驚かさばかり、主人は廿五六歳の青年で少しは英語が解かる、筆談と英語の

混合で晝頃迄油を賣つた。時計を見て喫驚し暇を告げると、主人が晝餐を共にしやうと言つて無理に引止めるので、然らばと其儘腰を据へ大に馳走に預り、便々たる腹を撫で、主人の厚意を陳謝した。併し三年間泥田の底へ埋けて置いた鶏卵といふ料理を出された時は、さすがに物に動せぬ吾輩も大に辟易してしまつた。

主人に送られて門を出ると先刻の門番僅かばかりの鼻薬が利いたと見へ、叩頭百拜して吾輩を見送つた。地獄の沙汰も金次第とやら、況して貪慾飽くことを知らざる支那人は、到底賄賂でなくば何事も駄目だ。日本の官吏は收賄して獄に投せられるが、支那の役人は收賄を官吏當然の役徳と心得て居る、此點等も能く言へば大陸的とても謂つべきだらうか。

領事館に大小平領事を訪ふて訣れんとしたが、領事は態々案内の支那人を附してまで染織工場を見んことを勤められた。吾輩は深く其厚意を謝し、案内の

(十八) 蘇州

寶帶橋——領事館員の不親切——支那人の醉漢——肩車で投付けた——  
干將莫耶の劍——美人西施は蘇州の産だ——范蠡に關する珍談——寒山寺

支那人を引連れ染織工場を見、其夜は大東汽船會社支店長遠藤君の宅に一泊の馳走に預かつた。

翌日午後五時再び大東汽船會社の汽船に便乗し、蘇州に向け杭州を發した。汽船は拱震橋の碼頭を離れ、武林渡、六里滌、東苕溪、菱湖、湖州を経て浙江省湖州府烏程縣下の南潯に入つた。南潯は湖州より來る運河と烏鎮に至る運河との交會點にある、汽船は再び南潯を出で、震澤を過ぎ七龍橋福安橋を左に見て北行し、吳江、三里橋、香村、楊家橋を送迎して、漸く蘇州に近づけば行手に寶帶橋の奇觀がある、此橋は運河と大蛋湖との間に架けられたもので橋門

五十有三、四圍の風景頗る絶佳である。傳説によると往昔一貴人が衆庶の便を計らんが爲め、傳家の寶刀を賣つて架橋の費に當てたといふことだ。

汽船の乗客は悉く支那人で、従つて食事は一切支那食である。乗客の等級は甲板客と室内客の二種で、室内客は亦一等二等の差別がある。

正午汽船が蘇州に着すると、直ぐ上陸して大東汽船會社支店長海津君を訪れ、其足で領事館員に就て蘇州の事情を訊かんとしたが、領事も書記生も不知不存の一點張に、天から相手にしてくれないには大に面喰つた。吾輩はかゝる没分曉漢を構つて居られないので、ソコ／＼にして領事館を出で城内の見物に出掛けると、前方から一個の日本人が来るのに遭遇した。どちら向いても知らぬ顔ばかりの外國で、故國の同胞に會ふ位心嬉しいものはなからう、吾輩は丁寧に道を訊ねると、氣輕な性質と見へ夫なら僕が案内しやうといふので兩個は連立つてテク／＼歩き出したが、方々引廻されたので大に空腹を感じた。夫も其筈

吾輩はまだ晝食前であつたのだ、何處か適當な料理屋があつたら飛込まうと思つて、左顧右眈しながら歩いてると、田舎者の東京見物ちやあるまいし、何をさう珍しうに見て居るのかと訊かれて、實は空腹を感じて斯くの仕末だと白狀に及ぶと、恰度僕も物欲しさの矢先だ、僕は君の壯舉を祝し併せて君の健康を祝さうと叫びながら、とある料理屋へ飛込んだ。樓上は客で満員、僅かに空卓子を發見して兩個は是に腰を下すと、隣の卓子では醉漢がブウ／＼管を捲きながら、切りに傍人に喧嘩を賣つて居た。吾輩等兩個は知らぬ顔の半兵衛然と煙草を喫して居ると、二言三語隣の客と言ひ争つた醉漢は、や、はら突立つよと見ると阿修羅の暴れたるが如く、四邊構はず亂暴を始めた。皿小鉢が飛ぶ、客は總立ちとなつて哩々騒ぎ出す、煙草の烟は濛々、室内を立罩めて、一種異精の悪臭が紛々として鼻を突いた。此家の主人は梯子段を驅上り此體を見て呆氣に取られ、鳩が豆鐵砲を喰つたやうにポカンとなつてしまつた。此騒動を機



會に勘定をすつばかして逃出す奴がある、主人が周章と後を追掛ると二階では、  
醉漢の鐵拳を頂戴してキャツと叫ぶ奴がある、けれども誰一人として手を出す  
奴がない、傍で見ると自烈度くなる、今迄寂寥として喫烟三昧に耽けて居  
た吉岡君は……話すうちに吉岡といふことがわかつた……煙草の吹殻捨て、靴  
の底で踏みつけたが、無言の儘起立したと見ると、矢庭に醉漢の襟元捉へ肩車  
に乗せてツデンドゥと投付けた。今迄大に手古摺つて居た處だから、同胞が酷  
い目に遇つたのを手を拍つて喜ぶ仕末、投げられた醉漢は疑性もなく起上つて  
しがみつくのを、振放してドンと突くとヨロ／＼とよろけて吾輩の膝へ堂と仆  
れた。散々な目に遇つて目眩だ醉漢先生、方向を失つて吾輩に喰つてかゝつた  
奴を、鐵拳固めて岩をも通れと殴りつけると、驚く可し大の男がオイ／＼と泣  
出した。相手が弱くなると支那人は強くなる、今が今まで醉漢の猛威に戦いて  
居た奴等が、急に元氣づいて忽ちの内に醉漢を戶外へ追拂つた。料理屋の主人

が叩頭して暴漢鎮壓の勞を謝すると、野次馬が雷同して切りに吾輩等の勇氣を  
賞めそやす、辛烈舌を焼くが如き支那酒を仰飲りながら吉岡君は、時々思出し  
たやうにニヤリ／＼笑つて居る、思ひがけない大騒動に喫驚した腹の虫が安堵  
すると、運ばれる料理は瞬時に消化してしまふ、空腹に一口グツと飲んだ虎骨酒  
に全身の酔は一時に發した心地のよさ、微醉機嫌の千鳥足で料理屋を出たが、  
同伴の吉岡君、時々天下を呑むやうな大法螺を吹くかと思へば、粹な音聲で端  
歌の秋の夜を誦いだす、南清蘇州の街頭で日本の端歌を聞かうとは思はなかつ  
た吾輩は、轉た故郷を懐ふの念に堪へなかつた。應て吉岡君の案内で一の染織  
工場を見たが、曩きに杭州で見たのと少しも異らなかつた。此處を出て城外  
の高塔に登つて蘇州全市を眼下に見下し、遙かに眸を放つて太湖の洋々たるを  
眺めた。吉岡君が朗々たる聲で詩吟をやれば、其一聲一聲に日は暮れかゝつ  
た。太湖の水面が暮靄に霞むと、何處からとなく響く鐘の音に、何となく物寂

しい心地がした。塔を下つて吉岡君と共に蘇州城外の風景を賞しつゝ、再び踵を回らして城内の夜景を見、其夜吉岡君の宅に一泊。

蘇州は春秋に呉の國都、秦に會稽郡、漢に吳郡、陣に吳州となり、宋に蘇州平江府と言ひ、明清共に蘇州と言つた。

府城は吳江の東岸にあつて太湖を控へ、水利の便は杭州と共に天下稀に見る處だ。六城門あり、東を婁門又は匠門といふ。匠門は吳王闔閭が時の刀劍鍛冶干將に命じて劍を鑄らしめた古跡で、干將は鍊へ上げた二劍に命ずるに、其妻莫耶と自身の名を以てした。里見八犬傳の淨瑠璃の文句に、干將莫耶の劍とあるのは即ち是だ。西を閶門又は胥門といふ一に破楚門と稱へて居る、胥門はもと伍子胥の邸のあつた跡だとか。南を盤門又は蟠門といふ、木製の蟠龍を作り鎮して越を壓すとか、御幣擔ぎの支那人だけに着想が中々面白い。北を齊門一に平門といふ。齊門は齊景公女が吳の太子に聘せられ、後ち太子歿し女常に齊

を思ふ因て齊門と名づけたとか、平門といふは伍子胥が齊の大軍を平げた時、此門から出たといふので斯く命名されたのである。

蘇州は杭州と同じく南清の名所だ。山水の秀麗は言はずもがな、風俗華美、人情溫和、現今でも文學の盛な處で、詩人墨客といつたやうな不生産的の什物が、悠々閑々としてあごひげを捻つて居るなどは實に天下太平だ。

日本の京都が美人の産出地であれば、蘇杭の間には同じく花情柳態人をして酔はしむる底の美人が多からねばならぬ。支那人が上に天堂あり下に蘇杭ありと吐したのは、強ち山水の明媚をのみ誇つた文句ではあるまい、夫も其筈だ彼の支那第一の美人西施は實に蘇州の産であつた。支那の婦人は室内に蟄居して良人の鼻毛をよむのを以て能事終れりと心得て居るから、不幸にして蘇州街頭一の今西施にも會はなかつた。併し日本で小町娘といふ如く、蘇州にも西施娘といふのがあつたなら、定めし近處近邊の若殿原の心を惱ますことであらう。

蘇杭の間にある名所舊蹟は逆も數へ盡されるものでない、殊に吾輩如き素通りした位では到底是等を云々する資格はないのだ。が併し其内で一寸面白いと思つたのが女兒亭である。日本で忠臣兒島高德が深夜秘かに櫻樹を削つて題した十字の詩に、范蠡の名は三歳の兒童でも記憶して居る、蘇州の女兒亭は范蠡と深い因縁がある、といふのは實は斯うだ。越王勾踐其臣范蠡をして、西施を取つて吳王夫差に獻せしめた。ところが范蠡と西施は吳に赴く途中飛んでもない濡事を演じた。意外にも越の忠臣范蠡は實に天下の色男であつた。口説たか口説かれたか兩個は途で宜しく通じてしまつた。絶世の美人西施を手に入れた范は只管悦に入つて、吳に往くのを頓と忘れてしまつた内に早や三年の星霜を経た、此時西施の生んだ女兒は一歳になつたが、不思議にも此亭に至つて能く語つたので、斯く兒語亭と名づけたとか。范の行爲は或意味に於て有夫姦だが、町内で知らぬは亭主ばかりなりと、范は蔭で赤い舌を出しながら何喰はぬ顔し

て西施を夫差に獻じたが、夫差は西施の美に魂を有頂天外に飛ばして喜んでる内に、會稽の恥を雪がんと秘かに機軸の熟するのを待つた越王勾踐は捲土重來して吳を攻めた。夫差は西施といふ美しいダイナマイトを懐にして其勢力を殆んど滅却し去つたとき、越の軍に攻められ苦もなく亡ぼされてしまつた。婦女は或意味に於て男子の生命を喰ふ動物だ、西施は夫差の生命と共に吳國の運命の大半を、美しい舌に嘗め盡してしまつた後、戀慕ふ情人の苑蠡に歸し琴瑟相和したといふことである。

女憤湖は無道好色なる父王夫差の不行跡を憂へて悶々の餘終に病んで死した吳の少女幼玉の屍體を閭門外に葬つた跡が、陥没して湖になつたのだといふことであるが、最愛の幼玉を悶死せしめ、西施に現を抜した夫差が再び越の爲めに破られたのは、誠に然るべき自然の成行だ。

彼の有名なる寒山寺は楓橋にあり、孔廟、圓妙觀、北寺塔、程公祠、留園等

は皆城の内外にあるのだ。

### (十九) 浙江省に於ける製糸業

日本人の起業は有望だ——五十圓で歐米を見物せよ——無限の富と智識——厄介な釐金税——起局と驗局——局員の貪婪——外國商人とは三聯單の便法がある

統計的の證明は清國に於ては到底不可能である。浙江省に於ける蠶繭製糸の産額の如きも元より不明であるが、江蘇、蕪錫、常州三地と併せて清國第一の稱あることは疑ふべからざる事實である。彼の支那系といつて糸業界に噴々たる評判ある原料は悉く此地方に仰ぐのである。清國の養蠶生糸業は六七年前には頗る幼稚で、製糸家は繭を乾殺することすら知らなかつた。だもんだから蠶蛆の脱出せざる前に製糸とし、糸行と稱する生糸仲買人が是を買ふて製織工場に廻し、茲で始めて緞綢、縐紗の類が出来上つたのである。然るに近來各地方

共繭の乾燥法を知り、清人の手にて乾燥所を設立するもの實に千五六箇所、從つて製糸業が勃興し上海のみでも二十餘の製糸會社が設立され、浙江省では杭州、洪震橋、塘棲、蕭山、曹娥の四箇所に製糸會社が起り、江蘇、蘇州には官設一、民設二の製糸場が生れた。原料の供給は豊富だし糸質も亦中々善良だ、若し清國で機械製糸の技術が発達し、歐米の資本家は盛んに投資して斯業の發達を計つたら、日本唯一の國産たる生糸は非常なる大打撃を被るかも知れない、吾輩は茲に斷言する、萬一吾國の製糸業者が此邊の注意を怠つたなら、何時かは飛んでもない馬鹿を見るに相違ない。吾輩は百尺竿頭更に一步を進めて、日本の資本家が此地方に一日も早く企業せんことを望んで止まない、日本人の製糸的技術は慥かに支那人よりも白人よりも勝れて居る、此地方に産する極めて豊富なる原料を以てしたならば成功疑なした。今日支那人は壯麗なる工場と、最新式機械を据付けたが爲め非常に多額の固定資本を費した上、無能の白

人教師に向つて莫大の給料を拂つて居るから、實に不經濟此上もない處へ、一方では工女が不熟練であるから、製絲業者は少なからず閉口しつゝある現状だから、吾輩は茲に日本人の企業を勸告せんとする次第だ。大地に打込む槌は外れても、吾輩の豫想の外れつこはないのである。なにしろ百聞は一見に如かずとやら、吾輩の意見に就て疑惑の念を抱かるゝ人士は奮つて南清視察に出掛けてもらひたい、神戸馬關から殆んど三晝夜で行かれる、一夜の飲宴に百金を費すことを思へば、南清視察費の五十圓は實に安値極まるものではないか、又若し歐米の風俗文明の程度を知らんとする人は、多額の費用と長日月とを犠牲にして遠く歐米に行くには當らない、海一つ涉れば上海があるではないか、足一たび上海の英佛兩租界に入らば決して歐米を見る必要はない、何處へ行つても要之あれだけのものだ、是だけでも安値のものではないか、五十圓を懐にして世界の都を見ることができる今日だ、心ある人士はドシ／＼出掛ける必要があ

る、尤も三四日の素通視察では何等の益もない筈、支那人旅館ならば一日五十錢で澤山だ、但し夜具持参のこと、また真面目に視察でもしやうといふ人は、支那人旅館に宿泊る底の意氣込でなければ到底徒勞だ。金を費つて紳士然とすました奴に限つて事物の真相は探り得らるべきでないのだ。吾輩は嘗つて北清で早川代議士に行會つた、同君が堂々たる日本の代議士として御用船に薩摩守を極め込んだのはさすがに豪かつたが、李鴻章の歿後其後任に誰が据はつたか、吾不關焉とすましこんで居たのは餘り賞められた譯のものではなからう、吾輩は敢て早川代議士の尊嚴をけがした譯ではないが、吾輩のやうな悪口屋に遭遇した早川君には全くお氣毒な次第である、金鎖を下げ懐手でオホンとやに下がつた奴に、話せる男があつた例がない、吾輩は是等の輩に一言をも費すことを惜むものだ。鬱積せるポテンシャルエネルギーに全身の血は焔へ、双腕夜々啼いて聲ある日東帝國の活動的男子は、須らく往いて南清を訪へ！ 汝の費す五

十圓は汝に無限の富と智識とを興へるものであるのだ！

思はず話が脇道へ外れたが、浙江省に於ける重なる繭の産地は、紹興府下では、紹興、山陰、會稽、餘姚、諸暨、蕭山、浦江、寧波府下では、鄞縣、慈谿、奉化、鎮海、寧波、杭州府下では、杭州、錢塘、仁和、富陽、餘杭、臨安、於潜、新城、昌化、嘉興府下では、嘉興、秀水、嘉善、海鹽、石門、平湖、桐鄉、湖州府下では、烏程、歸安、長興、德清、安吉、孝寧の諸地である。

繭の産額も固より精密なる統計が無いから不分明だが、産繭を金額に見積つたところで、一年間平均七千五百萬弗に上る、尤も此内屑繭二割と見ても、實に六千萬弗の多額に上るのである、而して是が悉く生絲の原料になるのだから、浙江地方に於ける養蠶製糸業も中々侮るべからざるものがある。

繭の相場は其當時、生繭で上物百斤に付き四十五六弗、中が四十一弗附近、下が三十三四弗であつた。乾繭になると遙かに高價で、上物百斤百四十弗、中

百二十弗、下でも尙百弗を唱へて居た。

南清で繭が市場に現はれ始めたのは漸く三十年以降で、其以前は養蠶家が自から手練で生絲にして市場へ持出したものである、日本でも往昔は慥かにさうであつたに相違ないが、現在は支那では繭行と言つて繭仲買を行ふ商賈が、市場に出た繭を買集めるやうになつて居る。而して殺蛹乾燥は此繭行の手でやり荷造りして製糸會社に造るのである、だから繭行以外の人が繭を買出すにはどうしても此繭行を借り入れなければならぬ、其借料は一ケ年三四百圓より五六百圓で、窳数は手広くやつて居る家では八拾個もあるが、小さい處では拾二個位である、要之窳数の多少に依つて借料の高下があるのだ。外國人で若し繭買入をする最も安全な方法は、殺蛹、荷造、船積に到る迄一切の手續を此繭行に依頼するが一番である、斯ういふ處はさすがに支那商人は堅實もので、任せられたら決して不都合なことはしないから重寶だ、日本の商人は此正直な支那商

人氣質を是非學ばなければならぬ。報酬は蘭買入高一萬圓に對し七百圓内外であるそうだ。

吾輩は茲に釐金税に就て述べなければならぬ。釐金税は清國特別の荷物税で、浙江に於ては二個の起局……荷物を積出す地方の局……二個の驗局……中途で荷物検査を行局……とを通過して納税をすましたものは、目的地に達する迄幾多の釐金局を通過するも、唯荷物検査を受くるまで、決して徴税されることはないのである。併し是は表面の事實に過ぎないので、貪婪飽くことを知らない支那官吏が、どうして法規條文を後生大事に遵奉て居るものか、お定りの賄賂を手にしない以上は、故意と検査に時日を費し加之幾多の面倒が生ずるので、大抵は賄賂を提供して無事に通過するのだ。だから商人は二重の釐金税を拂つて居るやうなもので、随分厄介千萬な習慣である。釐金税は斯の如く頗る煩雜を極めたものであるが、其裏面には恐ろしい手輕な脱税法がある、即ち

年の初めに釐金總辨と特約し、今年は何の貨物を取扱ふ豫定だからと言つて、釐金税若干を秘かに總辨に前納すれば、一年中免税の許可證が下附される、此證さへあれば釐金局の前を無検査で大手を振つて通れるとは、何處までも支那的にできてる處が實に面白い。

蘭に對する釐金税は、生蘭一擔、三弗乃至六弗、乾蘭一擔、九弗乃至十六弗である。此釐金税といふ税制がある爲めに、商人はどれほど迷惑するか知れないが、外國商人の貨物には一の便法が設けてある、例の三聯單といふのが夫で、外國商人が内地で物品の買入れをしようと思へば、先づ豫定買入額を定め、其額に應じ所在居留地税關に正税の五倍を納入し、所謂三聯單と稱する納税保證狀を受取り、買入地方に出張して物資の購求を終れば、其地の釐金局へ、出頭して三聯單の一葉を差出すと、釐金局では夫へ買入金額を記入して元の税關に送ると、途中釐金税は一切免せられ唯最終の釐金局が荷物の検査をして税

關に報告し、發着兩局の荷物額が符合すれば、茲で初めて陸揚げを許され實價に對する正税を算し、豫納額が正税に超過すれば割戻し、不足すれば更に追徴して荷物は商人の手に渡されるのである。時に過不及はあるけれども、豫納額を五倍と規定したのは多年の實験が割出したものであらう、外國人貨物は如上の便宜もあるが、支那商人は賄賂を以て漸く煩雜なる面倒を切抜けて居る、清廉仁慈自から道を樂んだ孔孟の國が今此有様だ、日本の教科書事件で獄に投せられた連中は、支那に生れなかつたのを悔んで居るだらう。

蘭買込に對する三聯單稅則從價稅は蘭百斤に付き一弗五十仙、屑蘭二分五厘である。

日本人には釐金稅の何物たるかを知らないものが多いが、まづ大概前述の如きもので、支那政府は長江一帶水利の便が旨くできて居る爲め、此好財源を發見したることを神明に感謝しなければならぬ。日本の通行稅も猶且一種の人類

釐金稅だが、さすがの日本政府も隅田川に釐金局を設くる勇氣はあるまい。

過る明治二十九年絲況が非常に好かつた時、支那人の手に依りて設立された製糸會社が四個あるが、悉く巨額の固定資本を下し。伊太利ケンネル式の機械を据付けて開業した。試みに上海から杭州へ向けて扁舟を浮べたとすると、石門と杭州の間に塘棲がある、杭州に着して船を捨てると直ぐ洪震橋である。更に杭州城を過ぎ錢塘江に浮かべば、右岸に紹興府屬蕭山縣がある、再び舟を轉じて寧波に向へば途中曹娥を過ぎるのである。此四ヶ所は前記四大製糸會社の所在地で、突として高く天に聳ゆる煙突からは、二六時中濛々として惡魔の息の如き黒烟を吐いて居る、併し其當時は流通資本の不足と、工女の不熟練の爲め大損失を來し、塘棲を除くの外悉く廢業の非運に陥らんとし、就中洪震橋の如きは全く機械の運轉を中止し、徒らに鋪他に任してゐるのは痛嘆すべきである。



塘棲製糸會社は資本金三十萬兩、建設費十萬兩、銅數百三十五個、女工二百人、工女一日日當十錢乃至三十錢、男工事務員六十人、一ヶ月經費四千圓内外、一日の製絲高一擔半、一ヶ年四百擔、賣込先は佛國及び米國であるが、其當時は絲況不振で、上海の倉庫には生絲が三百餘擔も停滯して居た。繭生絲の産地として有名なる此地方は、従つて絹織物でも噴々たる聲價がある、製織品は緞子、縞子、羅、紗、縮緬の五種で、尙是を細別すれば、縐緞、金花、寧緞、官綢、粉綢、六串、紡綢、貢緞、杭羅、七絲、羅貢、縐紗、寶地紗、小春紗、官紗、亮紗、綿綢等で漢字の本家本元だけに恐しく困難い名前ばかりだ。

吳服屋で織物工場を持つて居るもの、生絲問屋で製織を兼ねてるもの、個人的に自宅で織つて居るもの等種々であるが、一ヶ年の産出高は約五百萬弗で職工五萬人、内地の主なる販路は北清であつた處から、彼の團匪の變で販路が一

時杜絶されたが爲め、數萬の職工は業を失ふて路頭に迷ひ、果ては職工一揆を起さうとしたのを、救濟場を設けて日々錢米を給し、政府から特に十萬兩を下附して織物業者を救ふたので幸に事なきを得たのである。

(廿) 船中珍談

釜山で頼んだ荷物がまだ着かない——豚尾漢の腹痛——効顯如神——  
醫者と間違へらる——婿の病氣を診て下さい——婦人血の道に熊胆丸——  
——醫は仁術です——

蘇杭の絶景に魂を有頂天外に飛ばした吾輩も冬がくれば寒くなる、殊に防寒服の用意がないとききてるから最う一時も早く南方熱帯の地方に去りたくて堪らなくなつて來た。固より人並外れた突飛な吾輩と雖も冬の恐るべきは知つて居たので、家を出るとき其用意だけはして出たが、釜山出發に際し小倉郵船會社支店長に依頼して仁川迄送つて貰ふことにした。お蔭で京釜間の徒歩旅行は荷

物がなくて非常に樂だつたが、京城から仁川へ出て郵船會社支店で訊くと、那  
麼荷物は一向届かないと意外な挨拶に吾輩大に失望した。どうせロハで頼むこ  
とに行届いたことのあつた例なし、今更他人の責任を云爲せんより自分が北清  
の嚴寒に苦しめば夫で事落着に及ぶことゝ、たかを括つて仁川を出發し天津に  
渡航つた。着いた當座は左程でもなかつたが、吹曝しの寒風に雪が交つた北清  
の天候は餘り嚴しかつた。あれで能く感胃に罹らなかつたことゝ自分ながら不  
思議に思つたが、恐らく風の神も吾輩當時の元氣に辟易したのであらう。北清  
旅行を終へ上海へ來て郵船會社の支店で訊くと、此處でも頓と雲をつかむやう  
な挨拶だ。エイ儘よ打捨つてしまへと斷念めて蘇杭の間を漂浪したが、是から  
上海へ歸つて温かい香港へ行くのを唯一の樂みとして吾輩は茲に蘇州に訣別を  
告げることゝした。

大東汽船會社蘇州支店長海津君に暇を告げ、同社の汽船で吳淞江を下り上海

に向つた。汽船が棧橋を離れたのが午後五時、蕭條たる風物悉く黄昏の彼方  
に消へ去り、婆娑たる風は兩岸蘆荻の末に戦いて、落莫たる江上獨り汽船の生  
色あるのみだ。

日本人乗客は吾輩一人、殘餘は悉く沈芬漢紛の豚尾漢ばかり。

夜半になると吾輩と並んで寢て居た奴が酷く苦しみ始めた。どうしたのかと  
訊ねても言語不通で薩張譯は解らず、時々顔を顰めて腹部をなで、は妙に苦悶  
の聲をだすばかりだ。周囲の豚尾漢は手を拍つて何か亡國の歌を唸つて居る、  
此奴等不人情な奴だと一個の肩を叩いて苦悶する男を指すと、吾輩を日本人と  
見て

「知りません。」と日本語で言ふ。博愛同情を賣物にした孔孟の店舗が三千年の  
後に何故斯う寂れたかと、外國人ながら多少其餘澤を被つた日本人だけに、吾  
輩も大に自烈度くなつて、

「何故親切に介抱するありません。」と訊くと  
「私彼の人知らないあります。」と冷淡極まる挨拶。

「貴客日本に居たことありますか。」  
「然です横濱に五年程居りました。」

「他人が病氣になる日本人親切に介抱します、清國人は何故貴客のやうに冷淡ですか。」

「日本人と清國人違ふあります私日本人の真似できません。」とケロリとした。  
此豚尾漢の畜生言ふことに事を缺いて日本人の真似はできないと吐した。個人主義も茲に至つて極まれりと謂つ可しである、吾輩は此時爾う思つた。支那を亡ぼすものは區々たる革命思想にあらずして此極端なる個人主義だと。

「私彼の人の病氣治療してあげます、何處が悪いか訊いて呉ませんか。」といふとサモ驚いたといふ顔付で

「貴客醫者ありますか。」  
「然です日本の名醫です。」

「日本の名醫？」  
「遍ねく天下萬民を救済せんが爲めに世界を旅行するものです。彼の人の病氣も私が直ぐ治療して上げます、容體を訊いて見て下さい。」

日本の名醫といふに度膽を抜かれて眼玉を丸くして喫驚した豚尾漢は、ウンウン呻つて居る病人の傍に寄つて何事か耳語した。

「どうです腹痛でせう。」と訊ねて見ると

「貴客は眞實に名醫です、貴言の通り此人腹部が痛いあります。」  
「夫なら譯はありませ直ぐよくなります。」

「併し此人日本の名醫薬が高價いありますと憂慮します。貴客幾何で診察しますか。」と薬價診察料を氣にする處は何處までも支那人氣質を露骨に發揮して居

る。

「醫は仁術です。薬價は一文も要りません。加之私の薬は家傳秘密の神薬ですから大抵の病氣は其香を臭いだばかりでよくなります。」と飛んでもない大風呂敷を敷いた。由來支那人は法螺で以て烟に巻くに限るのだ。此薬をのんで御覽なさい位で難有がる動物ではないのだが、劈頭第一に日本の名醫でおどしつけられ、其名醫が無料で家傳秘密の神薬を施すと聞いては通辯の豚尾漢先づ驚倒せざるを得ない。

「金一文も要りませんか？ 夫は眞實ありますか？」

「日本人決して嘘吐きません、病人にさう言つて下さい。」

沈芬漢紛と切りに辯りつゝあつたが、再び吾輩に向つて

「病人無料なら薬が欲しいと言ひます。」と言ふ。

「宜しい診察して上げます。」と吾輩は鹿爪らしく咳一咳し、懐中時計取出し静

かに患者の脈搏を計つた。満座の眼は悉く吾輩に注いで居る。稍々久しく脈搏を計り眼瞼口舌を丁寧に見終り、一廉解つたやうな顔をして秘かにうなづき

「是は中々重い病氣だ或は生命がなくなるかも知れない。」と静かに時計をポケットに収めて長大息をした。

「生命がなくなる？」と自分の事で、もあるかのやうに驚いたのを、辛うじて笑を奥歯で嚙殺しながら

「が併し決して憂慮するに及ばないです、普通の醫者なら到底助かりませんが、私は名醫であります、家傳の神薬で屹度救けて上げますから病人にさう言つて下さい。」

氣輕な面白い豚尾漢であつたものだから、眞實空言取交せて患者に辯つたものらしい、苦悶の中にも漸く安堵したといふ風が見える。日本の大名醫と號する吾輩は此容子を見すまして、靴の中から取出したのが熊膽丸の一袋、能書に



大人は一度に五粒を用ゆべしとあるを、十粒ばかり細末にして水筒の水で服用せて遣り、名醫然とやに下がつて事態如何にと見てあれば、不思議にも今迄ウシク呻つて居た奴がまづ其苦悶の聲を絶つた。

付をして

「不思議あります此人苦しまなくなりました。」と言ふ。二十分も経つと病人はケロリとして起直り、叩頭百拜して沈芬漢紛と謝辭を述立てた。吾輩は再び脈搏を見て

「最う憂慮することありません、貴客の病氣は治癒りました。」と言へば通辯が一々言つて聞かせる、其度毎に拜まれるにはさすがの吾輩も可笑しくて堪らない、いゝ加減にして寝やうと思ふと氣輕な通辯先生

「貴客は日本の名醫ありません、世界一の大名醫あります。私の妻上海に居り



ます、病氣して今苦んで居ります、どうか診察て遣つて下さい、妻の病氣治癒る、私非常に嬉しいあります。」と厄介なことを言出した。

「宜しい診察て上げます、家傳の神藥どんな病氣でも直ぐよくなります。」

スルト通辯先生は満座の中央に起立して何か辯り始めた。何でも吾輩の廣告をして居るに相違ない、辯る奴の顔と吾輩の顔とを等分に見て切りに感心して居る容子は正に然だ。是は困却つた吾も吾もと遣つてこられては蒼蠅くて堪つたものにあらずと、内々逃げを張つて居たが駄目だ。最う一個の奴は齒が痛むと言つて来た。熊膽丸一粒を口中へ投込んで追拂ふと、次の奴は腰が痛むといふ、リユマチスに熊膽丸は滑稽だと思つたが仕方がない、五粒ばかり與へると叩頭して引下つた。頭が痛い尻が痛い、さうく熊膽丸も可笑しなものだから清心丹でごまかして辛とこのことで寝たのが午前三時頃、七時頃目が醒めて見ると茫漠たる長江に乗つて汽船は上海目掛けて矢を射るやうに航走て居た。

上甲板に上り江上を吹渡る曉風に嘯いて居ると、一個の豚尾漢がニコニコ笑ひながら接近して来た。氣味の悪い奴だと思つて居ると

「昨晚はどうもお困却でしたらう。」と流暢な日本語で話しかけられたには面喰つた。吾輩は無言の儘でデロ／＼其顔を凝視すると、彼は一枚の名刺を出した、手に取つて見ると驚くまいことか同文書院のKMといふ日本人であつた。

「熊膽丸に清心丹はどうも愉快でしたよ、ハツハツハツ。」

「君も傍で見てたんですか、オヤオヤ。」

「家傳の神薬も實に痛快でしたよ。」

「イヤ恐縮々々、君が患者に化けて來なかつたわけがまだしものつけめだ。夫にしても君が日本人とは思ひもよらなかつた。イヤハヤ大失敗！」

「例の支那人は大層君のことを吹聴してましたせ。彼奴の婢もたかが子宮病血の道位だ、構はないから熊膽丸の十粒も吞まして遣り玉へ、直ぐケロ／＼と

なるから……。」

「熊膽丸で子宮病血の道を直す吾輩はどうしても天下の名醫たるに耻ぢない譯だね。」

「ハツハツハツ。」

汽船がドシンと大東汽船會社の碼頭に着く、吾輩は是から上陸して病家廻りをしなければならぬ。

KM君と訣れ婢の病氣を診察て呉れと言つた豚尾漢を引連れ、差當つて用事もない身のブラリ／＼と其家に來て見ると思つたよりは小奇麗な構造だが、サテ婢大明神の病氣は何であらうか。

### (廿一) 纏綿たる別離の悲嘆

支那人の婢は日本婦人——日本一の名醫——清元が常盤津か——草根木皮——夫は結構——辛とホロを隠した——旦那殿の喜悅——晝飯の

馳走に預かつた——江南機器局——送別會

導かれて病室へ入つたが恐ろしい陰氣な室である。日本間にしたら六疊敷ほど  
もあらうか、片隅の寢臺に寝て居るのが病人らしい、出された椅子へ腰を下し  
四角八面に控へて髭を捻つて居ると、亭主の豚尾公病妻の傍に寄つて何事をか  
耳語し、顔を反向け、日本流に頭を下げ診察を請ふの意を示したので、吾輩は  
悠然と立上り歩を移して寢臺に近づいた。見ると病人は年の頃三十歳前後、顔  
面の骨格は支那人といふよりは寧ろ日本人に似て居る、吾輩が接近したのを見  
ても敢て恐るゝ素振も見へない、男子に顔を見らるゝのを以て唯一の耻辱とす  
る支那婦人には全く珍しい新思想を有する妻君だ、恐らく良人が五年間の横濱  
滞在にすつかり日本化したのであらう、夫にしても顔まで日本化するのには可笑  
しいと、やはら脈をとらうとした吾輩の顔を見た病人は、瘦せこけた顔に何處  
やら艶な笑を浮べて

「オヤ被入いまし。」と純粋な東京辯は少しも淀みもなかつた。吾輩思はずオヤ  
ツと叫んだ。

「此度は良人が大層お世話さまに相成りましたぞうで……それにまた、這麼穢  
しい家へまで御苦勞を願ひまして何とも相済みません。」

名醫と振込んでやつて來た吾輩も大に面喰はざるを得ない、是では並の腹痛  
でも熊膽丸で直りッこなし、併し吾輩此機に及んで化の皮の剥げるも残念だと  
思つたから精々すましこんで

「どういたしましたして……時につかんことを伺ふやうですが、貴女は日本の……」  
と皆まで言はせず

「左様でございます、妾も日本の生れでございますが、種々の事情があつたも  
のですから……。」

「さうですか、どうも支那の婦人とは受取れなかつたものですから……ハハア

なるほど二年程前に上海へ……して御病氣は？」  
吾輩は病人の返事を片唾呑んで聞いた。

「イエ何有貴郎四五日前に良人が蘇州へ参ります朝急に血の道が起りましたね。」

血の道！ 血の道！ 君は血の道に熊膽丸を服用せろ直ぐ治癒ると言つたが、郎を蘇州へ送るの朝別離を悲んで起つた情緒纏綿たる血の道を診察して、吾輩と雖も處方箋にまさか熊膽丸とも書けまい、殊に相手が日本人だから頗る厄介である。

「ハハアして見ると旦那様にお訣れになるとき急に起りましたんですな。」

「イエあの……オホ、……さういふ譯ではございませんですけれども……」  
ですけれどもは頗る餘情がある、妻君は病人とも思へない程顔に紅葉を散らし、旦那殿は獨り妻君の顔を見て悦に入つてござる、天下の名醫たる吾輩は此

間に介在して獨り可笑しさを嚙殺した。

「一體地がおあんなさるんですか。」

「地と申しますと……？」

「イヤ例の其何ですな……血の道の地が。」

「オホ、眞實に面白い方、妾また清元か常盤津の地かと存じましたワ。」と大に逆葉な物の言ひやう、ソロ／＼お里が見える、併し血の道に地はあるまい、是は恐らく妻君の意味のとりかたが其當を得たものかも知れない。吾輩も際どい處で油を絞られたので急に悄氣た。

「血の道の地は少し穿ち過ぎたですか、ハツハツハツ夫では一體前々からお悪かつたんですか。」

「別に大したことございませんですけれども、どうもね風土が違ひますんですから時々いけませんですよ、加之お醫者様が沈芬漢芬の藪ときてますから



ね。」と言つて夫の顔を一寸見て

「得體の解らない草や木の根を煎じて服用されるには毎度妾閉口しますの、日本に居ますときは是でも慥かな醫者様に罹れて、夫は夫は安心でございましてたけれども、支那へ参りましてからは病氣になると、眞實に、ゲッソリしますワ。」とソロ／＼愚痴が出初めた。吾輩は此言を聞いて穴へでも入りたい氣がした。天下の名醫も此に於て三文の價値もなくなつた。支那醫がある草根本皮と熊膽丸とは實に相距る僅かに半歩である、今眼前に支那醫を罵られては言々句々悉く夫が吾輩のこともあるかのやうに思はれてならぬ。吾輩は茲に投藥せざるに先だち精神的療法に依つて血の道を治療さなければ、吾輩の化の皮は直ちに剥げる勘定になるのだ。ハテ困却つた事件が持上つた。

妻君は日本流に鉢巻をして結目をコソ／＼と拳で軽く叩く、良君は親切に肩を擦する。

「妾今日良人が貴郎のやうなお醫者様をお連れ申したので、妾這麼嬉しいことはございませぬワ、是も何かの御縁ですかも知れませぬ。」

「或は然なんですな、吾輩も斯ういふ處で故國の同胞たる貴女にお目にかゝらうとは實に意外でした。全く奇遇とでも謂つべきでせうなア。」

「全く奇遇とやらでございませう、妾も何だか日本の方にお目にかゝつた故か、急に心強くなつてどうやら氣分もサツパリして來ましたワ。」

「夫は結構！お蔭で吾輩も大に旅情を慰さめたです。」

妻君の鉢巻がとれると何時の間にか血色が能くなつてきた。吾輩も心竊かに安んずる處があつた。思ふに此細君の血の道は寂寞の感が其病原であるらしい、

今や最愛の郎が枕席に待して親切丁寧に介抱に半ば元氣を恢復した處へ、天下の名醫といふより日本人といふ藥が利いて、メキ／＼と血色が能くなつたのであるのだ。

「貴郎今日はゆつくりあそばせな。」

妻君は蓮葉に斯う言つた寢衣姿で寢臺を下りた。旦那殿は呆氣に取られて妻君が黙つて下す腰の下へ椅子を備へた。最う大丈夫だ、斯うなれば形式的の診察でも格別ボロも出まいと、名醫然と時計を出し脈搏を計つて

「脈も至極平調ですから別にお薬を差上げる必要もありません。と言へば

「此病氣治癒のありますか。」と旦那殿の憂慮さうな顔付は實に珍無類だ。

「最う私が診察したゞけで治癒りました。」

「良人や此先生は實にお上手ですことよ。」

「最う何ともない？さうか難有うあります。」

旦那殿の喜悅は例へやうもない、また吾輩が熊膽丸を服用せる滑稽を演ずるの要もなく、まづ無事に天下の名醫の一幕は終つた。

事實を言へば吾輩は此家庭に於ける日清同盟を見て多大の好奇心を起したの

である。第一に妻君の前身は果して何物であらうか、夫は兎に角彼女の暗黒面

を仔細に研究したならば定めし面白い小説的事實が発見されやう、其浮世の奮

闘に疲れたらしい青白い顔は、彼女の悲惨なる半世の経歴を最も露骨に説明し

て居るではないか、杜鵑酒屋へ三里豆腐屋へ二里といふどんな田舎の在所でも

といふ端歌の文句はあれど、遠く故國を去つて上海の一角に小さき日清同盟を

形成しつゝある此妻君の心細さは、例令海千川千の甲羅重ねた剛の者でも、時

偶郎を蘇州に送るの朝、纏綿たる別離の悲みに堪へずして、可憐や持病の血の

道に悶へながらも、蕭々たる夜雨の窓におとづるゝ音を聞いては、郎を思ふて

ハラリ落る涙に兩の袖をしぼる點は、さすがに女性のやさしさであらう。

吾輩は不得要領の間に妻君の病氣を治療し、イザヤ暇を告げて立去らんとす

れば、旦那殿まづ驚いて吾輩の袖を捉へて引止め、次に妻君猫なで聲にて

「貴郎今日は眞實にゆつくり遊んでいらつしやいな、それに貴郎最う正午では

ありませんか、今に何か差上げますから、可憐だと思召して何か日本のお話でも聞かして下さいなね。」と頗る甘ツたられたものである。エイ儘よ、是も旅なればこそだ、序のことに今少し油を賣つて行かうと決心し、再び腰を椅子に下した時には、妻君が風通の綿入に縞御召の羽織を引掛けて出て来たところであつたので、吾輩暫時周囲の奇異なる對照に見惚れて居たのである。

三人食卓を圍んで談話に花が咲いた。薄暮暇を告げ支那人の俵を驅つて居留地の旅館に投じた。

翌日同文書院の根津、大原兩君と同伴して江南機器局を見學した。此處では造船造兵を行つて居る、職工が約千人當時獨逸式の小銃を盛んに製造しつゝあつた。案内の豚尾漢英語を頗る流暢に話すには驚いた。應接室で三鞭酒の振舞を受けて同文書院に歸つた。此處で又候油を賣り單身上海へ歸らうとすると、同文書院の西田君が五六の有志と共に吾輩の送別會を行ふから上海迄同行せよ

とのツびきならぬ嚴命に、然らば同道と豪傑連の驥尾に附し居留地の日本料理店に押上り痛飲快談夜の更くるのを覺へなかつた。吾輩は是より香港に向はんとす。

(廿二) 夜半の大珍事

香港に向ふ——衝突か坐礁か——貴婦人の寢衣姿——皆様御安心なさ  
い——支那船と衝突——四顧暗澹——天下の公海を無提灯——鯉魚門  
水道——砲後の人——平和の女神

長崎から釜山迄郵船會社の立神丸に薩摩守をきめこんだのは、同社の副社長加藤正義君の同情に依つたのである。吾輩が今上海から香港まで渡航せんとするには同じく郵船會社の汽船へ乗らなければならぬ、此時に當つて吾輩は再び上海で加藤副社長に遭遇し多大の同情に預かつたことを一言書加へて置かねばならぬ。其他上海領事館員、郵船會社、上海支店長、同文書院の豪傑先生達

の深き同情に感謝の意を表し、十二月十四日といふに和泉丸に便乗して香港に向つた。

釜山で依頼した荷物は遂に着かずじまい。錢を出さないと人間は身を入れてくれないものだ、が併し結局此方が身輕で宜いかも知れない。

揚子江口を去り針路を南に轉じて浙江福建の海岸に沿ふて南航した。夜になると大珍事が持上つた。

空は晴れて居たが月光はなく、臺灣海峡を吹上る海風にリギンが愁々と鳴る、波もかなり高い、波頭が折れて闇の中にも夢のやうに白い吹雪の花がほの見へる、ドドドドと舳を叩く波の音色に夜は漸く更けて、旅情の切なさは一入である。ゴットンゴットンと正直な機關が波を搔く一響一響に乗客の夢は段々深くなつた。

吾輩は静寂雄渾の氣に満ちた夜の海を好むものである、爛たる星斗を仰いで

は常に其一閃に何かの嘯を聞かんとあせるものだ、慘たる月光を浴びた夜の海もいゝが闇の夜の海も中々悔るべからざるものがある、赤青の兩舷燈華やかな上甲板の電燈は和泉丸の黑影を彩つて、今しも龍宮城からでも浮び出たやう。

夜は正に二時であらう、名も知れぬ怪鳥の叫聲が闇を貫いて耳朶を劈くと、星一つ南へ流れた。北斗七星とカシヨピヤ星座に挟まれた極星の異様な輝きには、恐るべき大暗示が潜んで居るのではないかと思はれた。

寢られぬ儘吾輩は前甲板の欄干に凭れて、和泉丸の鋭い船首が波を劈く凄じ態に見惚れて居た。船橋では船長が起きて來たらしい、那威訛りの英語が聞へだした、相槌打つてるのが是も英人の一等連轉士、暫らく快活に話合つて居たが應て船長は降りて行つたらしい、舵手が睡むさうに舵輪を操つて居る外は上甲板に人子一人居ない、吾輩も少し寒氣がしたので下甲板の三等室……無錢旅行の悲しさ吾輩の城廓は實に此狭い三等室であるのだ……に降りて横にゴ

ロリ寝やうとした途端！船首の方に當つて何物にか衝突つたらしい異様な音響が聞へた、と思ふとけた、ましい人間の叫聲がかすかに起つた。吾輩は衝突！と叫んで飛起きさま上甲板に驅上つた、殆んど如何にして階段を驅上つたか、電光の如き直覺作用で衝突と思込んだ吾輩は、恐るべき沈没の災厄を免れる外何事も頭腦になかつたのだ。昇降口から頭が上甲板へ出ると、

「總員上へ——。」と怒鳴つた船長の聲が耳に入つた、船長も吾輩と同じく寝やうと思つた矢先驚いて船橋に上つたものらしい。

和泉丸は全速力で機關を反轉した。

船橋からの號令を聞いた水夫は跳起きさま前甲板目掛けて驅集まつた。

船長は運轉操舵其他百般の命令を一人で下して一絲亂れない。

上等船客が驚いて寢衣の儘の妻君を腕に絶らせて上甲板へ飛出す、獨旅の貴婦人がはぎもあらはに誰をたよらうあてもなく、泣き叫びながら上甲板をウロ

付いて居る、喫煙室でランプに現を抜かして居たらしい日本紳士がどうしたツ？どうしたツ？と連呼しながら前甲板の方へ驅出した。何が何だか少しも解らない、惰力が止まつたのであらう速力通信機がカランカランと鳴ると、船長ガンカホンで何か怒鳴つて居る。

和泉丸は少しも沈没する様子もない、四圍の海面を見たところが衝突の相手らしい汽船もないやうだ。

上甲板は數多の船客で上へ下への大騒ぎ

「全體どうしたつですかい？」

「暗礁へ乗上げたさうですよ。」

「エツ……あの暗礁？ 夫じや無論沈没ですな。」

「良人や、どうか連れて逃げて下さいよ。」と年若の妻君が良人の腕に凭れて泣いて御座る、

「まあ待ちなさい、どうも變だ、今に船員に訊いて見るから。」と亭主殿はなだめる。

「良人そんな氣樂なことを仰つて……ヨウ！ヨウテバサ！」

總て此等は眞に刹那の出來事である、吾輩が衝突！と叫んで上甲板へ出てから、ものゝ五分とは経たないので、船員は無論事件の何事であるかの説明を與へる暇がない、一犬吠を吠ゆれば萬犬實を傳へて、坐礁、擱岸、衝突、あらゆる不祥の文字を並べて、さらでだに暗鬼の生じたる疑心を煽動する、氣早の人は手荷物提げて端艇の卸されるのを待つて居る。

吾輩は此等の騷擾を見捨て、船首甲板へ驅上つて見た。

「どうしたんです。」と水夫長に訊くと

「何有支那船と衝突したんですア。」と平然たるものだ。是と殆んど同時に船橋から船長が

「皆様御安心なさい！和泉丸は支那船と衝突したばかりで別に何ともありません、最う大丈夫ですからどうぞお就寝なさい！」とメカホンを口にあて、前後甲板にワイ々騒いで居る船客に向つて怒鳴つた。

見ると驚いた！和泉丸の船首はかなり大きい日本ならば千石積とでも謂ふべき支那船の胴胞を中央から殆んど眞二つに折つて居た。而して相手の支那船は土左衛門が兩國の百本杭に引掛つたやうに、和泉丸の船首に深く喰込んだ儘離れないで九分通り沈没しかけて居る、乗組の船頭水夫は大聲上げて號泣しつゝ、切りに救助を求めつゝある處だ。

「天下の公海を無提灯で歩くからだ、醜態見やがれ！」と水夫の一個はつぶやいた。

和泉丸の救助艇が漕ぎつけた時は支那船は全く沈没して十人の豚尾漢悉くアブ〜泳ぎ出した。

芝居なら此時月が出る處だが眞の闇の夜だから詮方がない、泣き叫ぶ聲をたよりに短艇漕ぎ寄せ、ボカ／＼海面に浮ぶ南瓜を拾ひ上げるやうに、例の辮髪クル／＼と腕に捲きつけては引上げ漸くのことに十人を救助したのが彼是夜のあけがた、野次馬の船客はまだ上甲板に残つて、濡鼠のやうになつた豚尾漢を圍んで珍しそくに語りつゝあつた。

夜間航行には規定の航海燈を點するのは天下の公法であるにも係らず、此種の支那船が平然として無提灯で航海し廻るのには支那海附近を航海する汽船が屢々手古摺るやうである、月明の夜はまた格別として暗夜に無提灯とは、支那船の亂暴も是に至つて極まれりと謂ふ可した。

和泉丸は是が爲めに時を費すこと三時間、再び速力を増して南航した。

明くれば十二月十五日、臺灣海峡を南下するに怒濤は依然として吾脚下に狂ひ、濛濛たる雨雲低く垂れて欄に倚るも展望五湮の遠きに及ばず、是れ恐るべ

き大颶風の襲來せんとする前徴ではあるまいか。

正午頃車軸を流すやうな雨が甲板を洗ふと、暫らくは四顧暗澹、和泉丸は此儘刻一刻と死の海へ引込まれるかと思はれた。

「また暴るかな。」と一人の水夫は空を仰いだ。

「何有大丈夫だよ、今に晴れらア。」と他のが言ふ。二人共合羽に身を固めて何か仕事をして居るのだ。

濛々たる雨を突いて海峡を北上する汽船の薄黒い影が搔きけすやうに薄れ行くさまは、何とも言へない程心細さうであつた。

午後二時頃一陣の疾風雨を拂つて空はカラリと晴れた。南方へ来た故か太陽の光線が一際威勢が能いやうだ、波はあるが雨後の海の景色は燃立つやうに美しい、牛山島が見える、吾輩は此雄渾なる海洋の美に打たれ暫し千古悠久の感に恍惚として甲板に吾あるを忘れた。

十八日拂曉和泉丸は既に香港島の南にあり、懸て針路を轉じ鯉魚門水道を指して北航した。香港島は廣東省伶竹灣中にある小島で珠江の口側に位し、港はカウルンと香港島との間に抱かれて頗る細長い、港の東西に水道があるが其東方の水道は殊に狭く幅漸く四百米突内外である、和泉丸は此水道を抜けて取舵に船首を向けると、突如として前面にビクトリヤの大夏高樓を望むことを得るのだ、是より速力を緩め徐々として進めば山腹の白壁赤壁が回轉式パノラマの如く眼前に現はれてくる、夫が又實に得も言はれない程美しい、吾輩は曩きに北米十年の放浪に宏壯なる建築物も敢て珍しくなくなつて居るが、初見の人人には夫がどんなに美しかつたであらう、港内に各國の軍艦商船がヒン／＼と碇泊して居る態は天下の壯觀だ。

和泉丸は商船碇泊場に投錨した。

本船の後から入港した伊太利軍艦「ベスブイオース」は英國を旗に對して禮砲

を放つた。般々轟々たる響に連れて兩舷の砲臺から一團の白煙がバツと迸るさまは實に美しい、吾輩のやうな門外漢にも大砲の音は威勢能く聞へる、間もなく英國軍艦「セント」から同数の禮砲が「ベスブイオース」に酬はれた。禮砲の轟く音は兩國親善の反響であるが、一旦砲口から實弾が發射されるやうになると、其時こそ兩國の國交が破れて戦争の慘劇が演ぜらるゝのだ、何と矛盾した世の中ではないか、平和の女神のいます臺は恐しい銃劍で支持されてあるとやら、機會均等と武力の平均が旨く行きさへすれば世界の平和は保たれるであらうが、夫にしても獨逸は常に英國の海軍力を凌がんとあせつて居る、帝國主義にかぶれた米國は近來無闇と海軍擴張を行ふ、就中意地の悪い露國は今後如何なるやりかたをするだらうか、由來戦争は絶大なる罪惡である、絶對の平和は吾人が望んで止まない處のものであるが、要するに是は一種の馬鹿げきつた理想に過ぎないので、蒼空に燦として輝く星を仰ぎ是が金剛石になつて降れば宜い



と思ふ痴人の夢と一般だ、イヤ金剛石と思つた星は地球の表面に降つてドス黒い隕石になるではないか、絶對の平和も人間社界に出現したら存外厄介なものかも知れぬ、蒼空に輝く星が金剛石の如く美しいと同じく、或一派の論者が唱ふる黄金時代も單に理想としてのみ絶大の價値があるに過ぎないのだ。戦争を以て人類發達に必要な要素だと號する人々に雷同する譯ではないが、要するに一時の平和は國力の休養期と見てよからう、其休養期の長いだけ次に來るべき戦争の慘禍は一段と激烈であるに相違ない、だから國際上の儀式として殊勝氣に行る禮砲交換も、砲後の人の心的状態に依つては、其大砲までも「今に見ろ」と響くかも知れない、何と物騒な世の中ではないか、平氣な顔をして香港港内に碇泊する英米露獨佛伊埃の諸軍艦も、其砲塔や水雷室に氣味の悪い叫びが聞へはしないか、平和の女神も女性の手一つでは是等の腕白共の操縦には定めし骨を折られることではなあらう！

### ( 廿三 ) 香港埠頭に支那苦力を殴る

実際に長じた紳士——靴一個——鑿の如き支那苦力——握太の洋杖——黒山のやうな野次馬——脊負投げを喰す——オイコラッ！——印  
度巡查

郵船會社香港支店から差廻した小蒸汽船で上陸すべく靴を肩にしてニヨコニヨコ上甲板に出て來ると、偶然名古屋の陶器商瀧藤君に遭遇した。同君は先年佛國巴里に遊んだ、けあつて頗る交際に長じた好紳士で、自己無限の精力と前途に輝く希望の光明の外、孤獨貧窮、寄邊なきの捨小舟にも等しい吾輩に對し熱實なる同情を寄せられ、尙在香港の平田忠一君に紹介されたのは感謝の外はなかつた。

吾輩は靴一個他に手荷物もない身軽であつたので、瀧藤君の荷物の世話などをしながら小蒸汽に乘移つて香港に上陸した。

埠頭へ荷物を揚げて吾輩は瀧藤君の荷物を保管して居ると、雲霞の如く集り来た支那苦力が争つて其荷物を運び去らんとするに吾輩六に面喰つた。まだ行先も言はない亦知れやう筈もないのに斯の仕末、吾輩も殆んど其亂暴サ加減にはあきれざるを得なかつた。嘗て釜山上陸の際にも斯ういふ目に遇つて大に閉口したが、其時は吾輩自身の荷物であつたから仕末が能かつたけれども、香港では瀧藤君の所有だから若しものことがあつては大變と、手真似口真似で制止したが聞かばこそ、瀧藤君は一時吾輩に荷物保管方を依頼して何處へか去つて居ない、苦力の奴はツイく騒ぎ立て、居る。

「畜生」と洋杖で追拂へど退かばこそ、瀧藤君早く歸つて来ればよいと思つても中々歸つて来さうにもない、苦力の蒼蠅いのに糞腹が立つて腕がムヅクする、引提へて擲りつけてやらうかと思へど、めんどうになつてはつまらないと虫を殺して我慢をして居ると、一人の苦力は圖々しくも愈々荷物を運び去ら

んとするに、最早さうくは忍んでも居られない、物の道理の解らないにも程がある、矢庭に握木の洋杖を振上げ苦力の脳天目掛けて打下したが、狙ひが外れてした、か右肩を打つた、アツとたぢろぐ處を鐵拳を固めて兩頬を碎けるばかりに見舞申した。此勢に辟易して數多の苦力は雲を霞と逃げ散つたが、擲られた苦力は支那人一般の慣例に倣つて、オイと泣出すかと思ふと吾輩の豫想は誤まつた、片手で肩片手で頬を押へてチツと吾輩を睥睨した件の苦力は、突如として打つて掛つた、是は面白い從來の奴は意氣地がなさ過ぎて聊か張合抜けのした處だ、豚尾漢の反抗は以て珍とするに足ると、六尺有餘の肥大漢が虎の如く咆哮して武者振付くの、さうはさせじと出鼻を洋杖で打ち据へる決心で振上げた洋杖を、魔王の如き怪力を以てフン奪つてしまつた、吾輩は最う防禦の武器としては双の鐵拳あるのみとなつた。相手は奪取つた洋杖を真向大上段に構へて一撃の下にぶちのめさうとして居る、吾輩は亦鐵拳を握り固

めてサア来い來れと身構へた。香港埠頭に今や日清戦争が押始まらんとした。物見高いは都會の常だ、野次馬が何處からとなく黒山のやうに集まつて来る、其多くは支那人だが中には黒色の印度人も居る、太い煙管を口にした赤髯の水夫も居る、是だけの野次馬が居ながら仲裁に入る奴も助太刀と出掛ける奴もな

呼吸をはづませて洋杖振上げた相手の苦力は、今や吾輩の脳天を狙つて打下さうとしたが、彼時遅く此時早し、危機殆んど間髪を容れず、身をかまして空を打たせ、ヨロ／＼とした處を足蹴にする達磨を轉ばすやうにヅテンドウと仆れたが、敵もさる者起直つて打掛る矢先を肩車に乗せて二間ばかり前方、人山を築いた野次馬の中へ叩込んでやつた。尻餅を突いて顔をしかめた隙を見計つて洋杖を奪返し、思ひさま懲しめてやらうと思つた處を、肩を叩くものがあるからとヨツと見ると雲突くばかりの印度巡査が身後に立つて居た。

「貴様なにう爲ちよッか。是は無論英語である、是に於て吾輩は事件の成行を辯じ立てた。悠々閑々たる查公は一々丁寧に聞取り、

「オイコラッ！」と泣きだしさうな顔をして居る苦力の肩を叩いて

「貴様は亦何故日本人の荷物を無断で運ぼうとしたんじや。」と詰問した。日本ならば此時、兎に角二人共署まで同行せよといふ幕になるが流石は印度巡査、俗事乃公を煩はすに足らずといふ顔をしながら、野次馬と共に苦力を追拂ひサテ吾輩に向つて親切に世話を焼いて呉る、其處へ恰度瀧藤君が歸り合したので、珍事の顛末を語ると同君も大に驚いたが、別に大事にも立至らなかつたこと、て、厚く印度查公に禮を述べ瀧藤君と共に馬車を驅つて平田君を訪れ、香港滞在中は瀧藤平田兩君の同情で居留地旅館に宿泊することを得た。香港は英國極東商業の中心であると同時に、同國東洋艦隊の策源地である。

一千八百四十一年英國の手に歸したが、占領當時は風土英人の健康に適せず、

香港へ来る英人は風土病の爲めに悉く仆れる騒ぎに英政府でも持餘し、上下の輿論は殆んど香港を放棄すべしといふに一致したが、先見の明あるジョンタビスが確乎不拔の意氣と高邁なる識見とを以て、轟々たる輿論を排し盛んに諸般の設備に力を盡したので、現今では人口二十萬母國極東商業の中心とまでなつたのである。

市内には交通機關として電車、人力車、支那輿がある、「クインズビルディング」や「ブックスビルディング」の大建物は巍々乎として雲を貫いて居るが、香港で最も有名なのは例のケーブルカーである、是はビクトリア丘(千三百呎)に登る爲めに設けられたので、是に駕して丘上に登ればクインズガーデンがある、下瞰すれば香港全市脚下に横はり、港内の大艦巨舶煙を吐いて壯觀比するに物なし、更に眸を轉じて小手打ちかざせば、茫漠として千里際涯なき支那大陸が北の方地平線下に没して居る態は宛然洋々たる海のやうだ。

香港に居る日本人は其當時漸く五百人程で、三井物産、郵船會社、正金銀行の支店出張店と、五六の雜貨店の外邦人の商業的經營としては別に見るべきものはない、尤も此外寫眞屋、旅館、料理屋もないではないが、此等は固より論ずるに足らないのだ。

吾輩は香港へ来て最も苦々しく思つたのは、日本人の風儀が一般に能くないことである。吾輩は茲に其時代と姓名とを公言するを憚るが、某領事の如きは日夕殆んど醜業婦の家を離れないといふ體態、勇將の下に弱卒なしとやら、領事の品行を見やう見真似の書記生其他の館員も、私語喃々たる昨夕の夢の見殘しを領事館の事務室で欠伸を嚙殺しながら現に見るといふ騒ぎ、熟柿臭い事務室には魂の抜けた木偶がゴロ／＼して居たとか居るとか、孰れにしても餘り感心としたことではないのだ。尤も吾輩が香港に行つた當時の領事館員の状態は、斯る不仕末極るものではなかつたのは敢て事々しく述立てるまでもあ

るまい。素行の修まらなかつたのは決して、某領事に限らない、往々諸會社の店員なども怪しげなのを内々引張込で楽しんで居たのは事實だ。吾輩は随分諸方を遍歴したが、日本紳士の身持の悪いので香港ほど激烈な處はないやうに思ふがどうだ。

吾輩は香港に着いた翌日葡領澳門に渡つた。香港から海上四十哩一日二回の便船があるから至極便利である、葡萄牙は現今でこそ歐洲の一角に偏在する渺たる小弱國であるが、往昔は随分東洋で幅を利かしたものだ。澳門も其當時支那から體能く強奪したもので、現今人口五萬市街の設備は悉く歐洲風だから、輪奐の美頗る見るに足るものがある、商業は格別日本人の注意を價するものはないやうだ。一個大隊の葡國駐屯軍は積年の平和に慣れ士氣沈滞し、港門を固めた嚴然たる砲臺も全然無用の長物だ。

澳門の葡萄牙人は日本人に酷似だ、是に就て面白い譚がある。吾輩は澳門の

街頭で一個の日本人に遭遇した、異境で故國の同胞に會ふ程嬉しいことはあるまい、吾輩は走り寄つて彼に道を訊ねた、問はれた彼は怪訝な顔をして沈黙して居る、吾輩は此男屹度聳者に相違ないと思つたから聲を高くして訊直すと、彼はサモ驚いたといふ風に何か解らぬことを辯りだした。這度は吾輩は呆氣に取られた、遂に何と挨拶のしやうもなく其儘無言で訣れたが、どうしても譯が解らぬ、彼は慥かに日本人に相違ないが何故に日本語を話さないだらうか、變挺な日本人もあればあつたものと、往來の男子を能く見ると始めて氣が付いた、悉く日本人に似て居る。何だ馬鹿々々しい澳門の葡萄牙人は日本人に酷似なんだ！

夫から吾輩は日本人らしいのに遭遇してもウツカリ口を利かず、犬も歩けば棒に當ると感念の臍をきめて、香港から貰つてきた紹介状にある吉川といふ人の番地を一生懸命に探したが解らない、其内に日が暮る、何だか心細くなつて

来たので我慢の角を折り、恰度行手からやつて来る葡萄牙人の顔が親切氣だから、丁寧に帽を脱し英語で道を訊ねると此男英語が解せないと思え、鳩が豆鐵砲を喰つたやうな顔をして居る、エイ糞面白くもないとも思つたが更に語調を緩やかにして話しかけて見ると、可憐其葡萄牙人が  
「何ですか？」と日本語で言ふではないか、曩に日本語で失策り今又英語で遣りそこなつた吾輩は、狐にでも魅まれたやうな氣になつた。  
「貴君は日本人ですか？」と勢い眼を丸くして問はざるを得ない。  
「どうしてですか？」  
「でも澳門の葡萄牙人は日本人其儘ではありませんか。」  
「あゝ成程貴君も失策りましたね。」

( 廿四 ) 深夜若狭丸を訪ふ

邪が非でも——萬事休矣——英國軍艦だ——大喝一聲——若狭丸なら  
隣だ——甲板上の事務長——墨西哥銀三弗しかない

香港滞在中は瀧藤平田剛原諸君の熱切なる同情を受け、十二月廿七日午前七時出帆の若狭丸に便乗して新嘉坡に向つた。と言つてしまへば何でもないが、愈々若狭丸に乗込む迄の苦心は實に並大抵ではなかつたのだ。元來吾輩は若狭丸の入港するのを待つて居たのだが、入港して見ると三等室は既に満員だから謝絶する！ 是には吾輩一方ならず閉口した。次の便船を待つには餘程の日子を要する、別に急ぐ旅行でないから日數の經濟はどうでもいゝが、實は最早懷中が頗る手薄になつて来た、其手薄な旅費さへ瀧藤平田剛原諸君其他の同情で獲たものである、此上厄介になるのは情に於て忍びない、吾輩は是非共若狭丸に便乗して香港を去らなければならぬ、と言つて僅かの三等賃金で新嘉坡迄の船賃を辨するに過ぎないのだから、邪が非でも若狭丸の三等室に這入りこまね

ばならない羽目になつてきた。此事に就ては瀧藤君が非常に周旋の勞を取られたが、若狭丸の船長は頑として應じなかつた。最早斯うなつては最後の手段を取らざるより外はない、吾輩は斷然決心して深夜若狭丸に乗り、翌未明の出帆と聞けば出帆後事務長に談判して事後承諾を得るに如かずと旨を瀧藤君に語れば、事茲に至る固より他に途なけん、大功は細瑾を顧みずとさへ言へば、決行べし決行べし大に行るべし、君の旅行者が既に突飛だ破天荒だ、敢て薩摩守たらんとする譯でないから結局若狭丸の奴等も承諾するに定まつて居ると大賛成、吾輩も大に力を得て、然らば再びお目に掛らんまではと立上れば、大丈失双の鐵脚を以て五大洲を踏躡る快是より大なるはなし、好男子願はくは自愛して海道一の名物男たるの名を恥かしむる勿れイザ埠頭まで送らんと、瀧藤君を首とし平田剛原の兩君に途々油をかけられながら波止場へと來たのが、夜も早や二時過ぎ、晝間の活動と熱鬧に疲れた香港の市街は時偶アーク燈の光が青く輝く

のみ、波止場には人影ひとり通らない、沖には碇泊艦船の碇泊燈がボンヤリと光つて、萬籟悉く死して居る！  
瀧藤君は小聲で附近の通船を呼んだ。吾輩は人や來ると四邊に氣を配つた。夜色沈々として四邊は静寂として居る！  
英國政府の規定に依ると香港では夜の十二時過には小船一隻出せないのである。吾輩は進退茲に谷まり英國官憲の規定を破つてまでも若狭丸に乗込まなければならぬ、風聲鶴唳、コソといふ物音にも氣が措かれる！  
土人の船頭奴、夜半過は客がないとたかを括つて寢込んだものか、呼べども呼べども起きて來ない、さうかと言つて大聲張上げやうものなら附近の査公が感付くに相違ない。  
「畜生！」と思はず吾輩が叫んだ途端、靴音が聞へた！と思ふと早や英國警官の姿が十歩の間にあつた。萬事休矣！

規定の訊問に姓名まで記帳せられたが、道に迷つて斯の仕末とゴマかしたのが旨くいつて、應て查公の後姿が闇中に消へた。

漸くのことに土人の通船を一隻雇い若狭丸指して漕出させた。瀧藤平田剛原の三君と熱實な握手を交換して訣別したが、海岸に佇立して吾輩の端舟を見送つた三君の姿が愈々見えなくなつた時、船頭が欠伸を一つして大きい外國船の船尾を廻つた。

宵の内はカラリと晴れて空には星が降るやうであつたが、何時の間にか曇つて星一つ見へない、暗黒！暗黒！船頭は吾輩を乗せて首尾能く若狭丸に達することを得るだらうか？

應て大きい汽船の舷門の下へ船を着け船頭漕ぐ手を止めた。吾輩は専念に若狭丸に來たとばかり思込み、舷梯を驅上らうとしたが、萬一間違つて居ては大變だと英語で下から訊いて見た。

「此船は若狭丸ですか？」

「否」

「日本の汽船若狭丸は何邊に碇泊して居ますか？」

何を間違へたか

「本艦は英國軍艦の「グローリー」だッ。」

オヤオヤ！船頭奴、吾輩を英國東洋艦隊の旗艦「グローリー」へ連れて來たのだ、仕様のない奴だと怒鳴りつけ、再び漕着けた汽船で聞いて見ると寂として聲がない、見たところ若狭丸にしては些と小さ過ぎる、又失策つたと漕出せば、船頭曰はく、疲れたから少し休ませてくれ！

空を見れば今にも降出しさう、一度ならず二度までも失敗した吾輩は氣が氣でない。

「馬鹿！」と大喝一聲叱りつけた。船頭も吾輩の權幕に恐れて濼々と漕初めた。



「漕げ！一生懸命で！」

若狭丸やあると暗中を探れど一向夫らしい汽船を見ない。詮方盡きて

「英國軍艦へ着けろ！」と言ふと船頭懸て着けたのが一個の軍艦であつた。尤も此船頭頗る無意識な男で、何船へでも手當次第に漕付ける處は非常に滑稽である。吾輩が通船を一旦軍艦に着けた所以のものは、商船の當直水夫は寝てしまつて呼んだつて起きるものでないが、軍艦は有聲に規律があるので正直に當直して居る、だから舷門の下へ行きさへすれば舷門番兵が控へて居るから、或は若狭丸の錨地を訊ねたら解るかも知れないと思つたからであつたのだ。

「日本の汽船若狭丸の錨地は何處でせうかなあ。」

「若狭丸？」

「さうです、日本の汽船の……。」

稍々暫らく寂として聲がなかつた。

「若狭丸か、若狭丸なら此隣だツ。」

吾輩ホット一息吐いた。

「多謝々々！」船頭が漕ぎだすのを止めて

「此艦は？」と訊くと

「米國軍艦の「ウキルミングトン」だツ。」

「さうですか、大に難有う。」と教へられた隣りの汽船へ来て見ると、夜目には能く判らないがどうも若狭丸らしい、試みに訊いて見やうと思つたがサテ因却つた、見上る船上は寂寥として誰も居ない様子、エイ構ふことがあるものか無断で乗つてしまへと思つた途端、後甲板に出て来た人影がある、夫も闇をすかして漸く判る程臚乎としたもの。

「此船は若狭丸ですか。」と英語で訊ねた。スルト後甲板の人影は欄干に凭れて然と答へた。メたツと思はず叫んだ時は大粒の雨がポツッリ顔にあたつて居

た。

「事務長に用事があつて来たんですがね……」

「誰方ですか一先づお上船なさい。」

吾輩は舷梯に飛移り手真似で船頭に歸つてしまへと命じて置いて、闇中舷梯を猿のやうに驅上つた。願所つて見ると吾輩を乗せてきた船頭の影も形もない、心中秘かに成功を喜びながら後甲板に来て見ると、先刻の船員は闇の中から斯う言つた。

「僕が事務長ですがね、どんな御用ですか？」

「アツ貴君が事務長でしたか……」と餘りのことに二の句が次げなかつた。

「爾うです僕ですがね……」

斷然秘密乗船と決心してやつて来た吾輩も、偶然遭遇したのが事務長だと聞いては内心頗る安らかでなかつた。が併し、最早斯うなつては策の施す處はな

い、物はあたつて碎けると度胸を据ゑて一伍一什を物語つた。

「さうですか、夫はなにしろ大變でした、併しお氣毒ですが三等室は海軍の水兵で恰度満員になつて居ますから、只今のところどうも二等より外には……」

と事務長も困つたと言ふ顔付、吾輩は全く三等賃金より所持せざる旨を告げ、且つ例の旅行證明簿を示し、加藤郵船會社副社長及各地の支店長の同情に接したることを示さんとしたが、時しも沛然たる驟雨が船を襲ふたので、事務長は吾輩を拉して自己の船室へ連れて行つた。此室で懇談の結果事務長は終に吾輩の壯闘に同情を寄せ、三等賃金で二等船客の待遇をすることに同意された。

「が併し船中で切符をお購求になると社則として一割の増額を戴かなければならませぬ。」と算盤玉を動かして見て

「普通賃金が廿二圓ですから一割増で廿四圓廿銭になりますか……」と吾輩の顔を見て笑つて居る。吾輩は此時餘錢としては墨西哥銀が三弗あつたばかりだ、

此三弗を拂ひ盡さうものなら吾輩は萬里の異境に全然無一文とならなければならぬ!

「事務長! 吾輩は此處に墨西哥銀が三弗あるばかりだ、是を拂つた日には新嘉波に上陸して直ぐ餓へなければならぬ!」といふと事務長も暫く考へて居たやうだつたが、慨然とした調子で

「宜しい! さういふ譯なら僕が失禮だが一割だけ寄附しやう!」と言放つた時は夜もソロ／＼と明け初めた頃で、出航の準備であらう機關室では火夫が何か聲高に語合つて居る、船外の雨は止んだらしい、事務長室の電燈がバツと輝いて、卓上に飾られたるは最愛の夫人の寫真か年の若い美人の半身像が、今しも梓からゆるぎ出さうであつた。

### (廿五) 若狭丸甲板上の英佛戦争

堂々たる大艦隊——大言壯語——私語低唱——露國艦隊だ——へん今に見ろ——英佛紳士の口論——興味ある問題——膏廣の日本紳士——軍艦通航委員の一行——喫煙室の快談——圍碁將棋で事務長をへこます——船中の餅搗

若狭丸事務長の厚意に依り三等賃金で二等船客になりすまして香港を出發した。廿八日東京灣沖海南島の南を過ぎ、廿九日「バラセル」列島と「マクレスフイルドバンク」の間を航過けて洋中に乗出すと、行手から龍蛇の陣形勇まじき大艦隊がやつて來た。距離が遠いのでまだ何國の艦隊か判らないが、其陣形は誠に堂々たるものだ、平和の時代には軍備は慥かに不生産的の事業に相違ないが、斯うして十數隻の朦朧が列序を正して白波を蹴る態を見ると、何國のかは知らないが何となく羨望の情に堪へぬ、由來武力の伴はない外交は多く失敗してしまつて居るが、此大艦隊はソモ孰れの邦國を強迫せんとするものであるか、彼は東航する吾は西航するもの、距離は刻一刻と接近しつゝあり、船客は悉く

甲板に出て飄々と吹渡る海風に嘯きながら小手打ちかざして艦隊の近づくのを今や遅しと待受けた。若狭丸の船橋には船長連轉士の外脊廣服の無造作な扮装の紳士が三人ばかり望遠鏡を手にして、艦隊を望んでは何事か愉快氣に語合つて居る、前部甲板には便乗の日本水兵の二團が、是も遙かの海面を眺めて餘程話の花か咲いてるらしい、酒々たる當世ハイカラ紳士の腕には、花の如き美人が寄掛つて居る、欄干に凭れるもの、安樂椅子に倚るもの、霜々たる大言壯語、喃々たる私語低唱、洋々たる平和の氣を載せた若狭丸が、某國の艦隊を右舷船首五千米突の處に望んだ頃、突如！一團の白煙ムラ／＼と起ると、股々轟々、艦隊の右舷砲臺は悉く唸りだした。あゝ何等壯快の景ぞ！

「英國艦隊だらう。」

「佛國艦隊だらう。」

「イヤ獨逸東洋艦隊だ。」

「艦型から押すと米國艦隊らしい。」と通がる紳士もある。

吾輩は當初から露西亞の東洋艦隊だと睨んだ。接近して見ると案の定、乗客の露西亞人夫婦が手を拍つて喜べば、傍の佛國の紳士が手巾を振つて騒ぐ、獨逸人が微笑けば英米兩國の紳士は嫌な顔をする、日本人一同は申合せたやうに沈黙りこんでしまつた。前部甲板では日本の水兵が腕を扼して

「空砲發射演習が聞いてあきれらあ。」

「ちやんちやら可笑いや。」

「へん今に見てろ！」などと聲高に罵り合つて居たが、今迄雙眼鏡で露國艦隊を眺めつゝあつた若い紳士はフト前部甲板の騒ぎを耳にしたものか

「オイ皆騒々しいよ。」と優しくたしなめたので口を突いて出た痛罵の聲がハタと止んだ。

歴史に日本と露國は今迄どうも仲が悪い、イヤ露西亞が東方侵略政策を放棄

しない以上、又日本が自國存立の基礎に危害を加へんとするを防ぐ必要がある以上、兩國は地理上歴史上どうしても衝突は免かれない、此事は恐らく兩國の政府も國民も自覺して居るに相違ない、吾人は東京の中央にニコライ會堂が建つたからといつて露西亞人を嫌ふのではないのだ、露西亞に對する敵愾心は帝國の歴史が與へた最も深刻なる印象である、斯の如く日本人が露西亞の總ての物を毛嫌にするのは無理もないとして、人間には最負といふことがある、尤も力士や藝人の最負は利害關係を度外視した一種の感情であるが、邦國を世界の土俵上に於ける力士と見ての最負々々は、主として利害を打算して算盤玉に現はれた感情である、だから露西亞人には大抵獨佛兩國の人が肩を持つと同じく、日本人はどうも英米の同情を受けるやうだ。處が茲に一つ珍事が出来た、といふのは甲板上で激烈なる英佛戦争が押始まつたのだ。兩國の争點は日露の優劣論にあるやうだ。

此時若狹丸は露國艦隊を右舷船尾に見て居たが、英佛戦争は今や酣である、英國を代表して日本は徹頭徹尾東洋の霸者であると主張したのが、アスキス君といふ年少氣銳の青年紳士で、佛國を代表して露國の極東侵略政策は、西北利亞鐵道の完成と租借した遼東半島の設備とに依つて目的は達せらるゝものだと主張したのは、ベルタンといふ四十を超した分別男であつた。國際間の戦争には第三國は嚴正中立を宣言するが、個人間の争論には這麼究屈な義理立は要らぬ、英米人はアスキス君に加擔して、今の露國艦隊が近き將來に於て何れの海底に沈むかは蓋し興味ある問題だと痛罵すれば、露獨佛の三國同盟を形成して、日本は結局支那からは勿論韓國からも驅逐され、止むを得ず南方ヒリッピンを狙つて終に日米戦争で壓服され、嘗つて光榮ありと誇つた日本の歴史は最後の頁を滅亡の二字で飾られる外はあるまい、此時露國では彼得大帝が地下で初めて微笑まれるの時だと、口角沫を飛ばして痛論したのを聞いたアスキス君は、露

國が巨億の財を極東施設の爲めに抛たんとするのを若し地下の彼得大帝が耳にしたら、帝は娑婆と冥土との間に通信機關がないのを悔むだらう、現今の露國は此間の無線電信を發明することに依つてのみ滅亡を免かれ得るのだ、賢明なる彼得大帝が地下で微笑むのは、露國が火事場盜坊に似た侵略政策を斷念した時であるのだ、要するに佛國といふ弗旦は露國といふ醜業婦の手連手管にまるめ込まれて居るのだから、親の意見も兄弟の忠告も耳へ入るものではないのだ、また他人の懷で面白い目を見やうとする獨帝ほど天下に恐るべき狡猾兒はあるまいと、饒舌を振つて悪罵を逞しうした。逆も叶はないと思つたものか當の相手のベルタン君が沈黙つてしまつたので、アスキス君も頗る手持無沙汰さうに安樂椅子に倚つてニコニコ笑つて居る、陰鬱な顔色をした露西亞人が色の白い小柄な細君の手を引張つて散歩さだと、ベルタン君が喫煙室に這入る、さしに激しかつた英佛戰爭は終に是で閉幕となつてしまつた。

先刻船橋に居た脊廣の日本紳士が二人腕を組合つてやつて来て、アスキス君と顔を見合したと思ふと雙方が周章と握手する態が如何にも睦じさう。君等は先刻の英佛戰爭を見たか。」とアスキス君は笑いながら言ふ。

「英佛戰爭!」

「然り英佛戰爭! 兩國の争點は日露の優劣といふ興味ある問題!」

「ハツハツハツ、先刻の露國艦隊から起つたことだね。」

「然うだ! 然うだ! 僕は彼露國艦隊が何處の海で沈むか興味ある問題だと

言つてやつたら、眞赤になつて怒つて居たよハ、ハ、ハ、ハ。」とアスキス君

は磊落に笑つた。「そいつあ随分斷乎たことを言つたものだ。」

喧嘩が身に入つて何時の間にか正午になつた。食事を報する鐘の音に空腹抱

へ急いで食堂に下つた。

午後給仕がやつて来て閑暇あらば遊びに来て下さいと言ふ、誰からだと問へ

ば一等船客の大山海軍大尉と宅野工學士だと言ふ、旅行は道伴世は情是でこそ面白いと早速喫煙室へ出掛けて見ると、大山宅野の兩君の外平野大軍醫室田大主計なども居られる、先刻船橋に居た春廣の紳士は大山平野室田の海軍士官連であつたのだ。

氣輕なアスキス君が入つて来る、談話に花が咲く、英語日本語チャンボンで喫煙室は何時になく賑つた。大山君が吾輩をア君に紹介すると、口達者の同君はソロ／＼舌鋒を向けて油をかけ始める、茲でも日露優劣論が始まつたが満場一致で露國の極東政策を否認したので別段喧嘩にもならず、大山君が吾輩の名刺を持出し釜山で能勢領事と言つたやうなことを言ひ出したので、種々批評的の議論が始まつた。大山君は世界一週旅行家の七字は廣告かと言ふ、ナニ看牌さといふのが平野君、看牌でも廣告でもない一種の肩書だらうと評したのが宅野君、其處へ小川事務長がやつて来て將棋を一勝負どうだと言ふ、然らば御

相手と將棋盤取出し奮闘すること敷合、連戦連勝の勢に事務長まづ僻易し、代つて出た大山君を手もなく打破り、騎虎の勢凄しく平野室田の兩雄をして遂に吾輩の軍門に降らしめた。然らば圍碁で来いと江戸の仇を長崎で討つ存の小川事務長が碁盤を運び出すに、今更引込むは男子の恥辱だ、希望とあらば随分返討にしないものでもない、太平樂を吐きながら廳て局に面すれば、將棋に負けた悔しさか鋭鋒侮るべからざるものがあつたが、結局吾輩の勝利に歸した。

大言壯語、快談放論、思はず日を暮し夕食の鐘に驚いて食堂に降りたが、恐らく其時位愉快な思をしたことはなかつた。

明くれば三十日、船は元旦の用意に急がしい、賄室では餅搗が始まつた。

三十一日、今日で卅四年はなくなつてしまふかと思ふと何となく名残が惜まれるが、年の暮は寒いものだと思つて居る日本人は、炎熱焼くが如き赤道近邊

では何となく物足りない心地がする、併し年の暮に差異はない、吾人は思出の多い卅四年を送つて一陽來復と共に新しい希望を抱かねばならぬ。アナンパ列島を見て若狭丸は只管新嘉坡へと急いだ。  
寝られぬまゝ上甲板に出て胸を開いて萬斛の海風にあたつた。熱帯と雖もさすがに夜の風は涼しい、空は晴れて星が降るやう！

(廿六) 退屈凌ぎに偽醫師の助手となる

正月元旦——佛人の酔漢三等室に管を巻く——新嘉坡上陸——人種の共進會——熱帯の景趣——スタンフォートラツフル——日本の女郎屋——患者門前に市をなす

明治卅五年一月一日、飛起さま甲板へ出て見るとまだ夜は明け放れないが潮は正に満ちて居るらしい、曉色蒼茫として海影恰かも煙に似たる間、ホースバ―燈臺の燈光が淡く夢のやうに輝いて居る。睡つたやうな熱帯の海を船は滑る

が如くに進んだが、懸て地平線下ならせりあげて團々たる朝暾が現はれて來ると、洋々たる平和の瑞氣が船にも海にも満ち渡つた。  
朝の食卓には日本流の雑煮が出た、窮屈さうに箸を持つた西洋人の風が又頗る滑稽であつた。

若狭丸の三等室に一組の佛人夫婦が乗つて居たが、此亭主殿頗る酒の上が悪いので妻君は始終大こぼしであつた。今日も今日とて正月の屠蘇を日本水兵から勧められて呑む程にあほる程に、へっれげに酔拂つてしまつた。スルト平常の持病が出たと見へ、妻君が立つて止めるのも聞かず、日本ならばもろはだぬきとくる處だが西洋だけに上衣も下着も脱捨て、亂暴にも食卓の上へ飛上り、だを巻き始めた。市井の酔漢が一杯機嫌の千鳥足で、ヤイ何がどうしたてんだいと手甲で鼻の下をこすりペロリ上唇を嘗める圖は日本人には珍しくないが、赤髯がくだを巻くのは絶代の珍だ、文句は解せないが口調が可笑しいので



水兵連は手を拍つて嘯し立てる、妻君が引下さうとすれば尙ほ猛り狂ふて、拳を振り足を踏鳴らして啖呵をさる、細君は餘りの亂暴に手の附けやうがなく手巾を顔にあて、泣出した。  
「此赤髯の野郎擲りつけてやらうじやないか。」と二個の水兵が動議を提出した。

「まア止せ、今日は正月元日だ。」と兵曹らしいのがなだめる、赤髯の醉漢疲れたものかグウ／＼高いびきで寝てしまつた。

午前九時船は新年御目出度と新嘉坡に入港した。吾輩は小川事務長其他に訣別して新嘉坡に上陸した。

新嘉坡は新嘉坡島の南部にある自由貿易港で、英國海峽殖民地中重要な位置にあるのだ、由來海峽殖民地といふのは十八世紀頃に、「マラツカ」「ペナン」「キーリング」及「クリスマス」等の諸島で形成されたもので、最初はペナンが殖

民地の主要部であつたが、千八百十九年スタンフォード、ラツフル氏がジョボール王と特約して新嘉坡島を占領して以來、殖民地の商業的中心は遂にペナンから新嘉坡に移つたのである。なにしろ東西南洋の關門だから日に船千艘の賑かさ、従つて商業は非常に繁盛である。其位置が赤道直下にあるので焼けつくやうに暑いだらうと思つたが存外さうでもない、一月頃の氣候か日本ほんの五月頃で夏期になつても其割合に暑くないさうだ、人口は十萬あるが土地が土地だけに、歐米人は勿論であるが其他東洋方面のあらゆる人種を網羅して居る、新嘉坡へ來れば人種の共進會きんしんかいか陳列會ちんれつかいでも見るやうだ、就中例の豚尾漢ちんぶいが其多數を占めて居るから、家屋建築にも支那趣味が歴然として現れて居る。在留邦人は約三百人、領事館、三井物産會社支店、農商務省商品陳列所、雜貨店などが目星いもので、其他寫眞屋、洗濯屋があるのは無論だ。

新嘉坡の市街は島の東南に於て海岸四涇の長きに涉つて居る、新嘉坡河か其

間を縫ふて海へ流れると、兩岸の緑も濃い熱帯樹が逆さまに影を水へ投込む、鬱蒼と繁つた椰子樹の間に隠見する白ペンキ塗の西洋館がいかにも涼しさうである、睡つたやうな、さうかと思ふと生々したやうな不得要領の熱帯の風色も、見る人の目には更に美しく映るのである。

海岸に公園がある、園内一面に敷詰めた青毛氈は天然の緑草で、名も知れない熱帯樹が繁合つた緑蔭下のロハ臺に、西洋人の若夫婦や黒奴の下婢が腰を下して居ると、其前を裸足の馬來人が通る、實に奇妙奇天烈な現象である。

新嘉坡の今日あるは、ジョボール王を旨くゴマかしたスタンフオードラツフル氏に負ふ所が多い、だから英本國は勿論新嘉坡の市民と雖も、未だ一日としてラツフル氏の功業を忘れたことはあるまい、新嘉坡公園には此偉人の銅像を建てられてあるが、堂々たる其姿は當年のラツフル氏を思はしむるに足るものがある、學校、旅館、圖書館、博物館等大抵はラツフル氏の名が冠せてあるの

を見ても、いかにラ氏の偉蹟が喝仰敬慕されるか、解るのである。

吾輩は吾農商務省の商品陳列所を見て驚いた、陳列商品は悉く數年前の製産にかゝるものゝみだ、是では商品陳列所といふより古物陳列所と改名した方が適當ではあるまいか、農商務省はまさか斯の如き古道具然たる商品を列べて、日本の商品は是にといめをさすので御座ると廣告するのでもあるまいが、夫にしても年々何千圓といふ經費を注込むならば最少し身を入れて行つて貰いた

い、でないとはあるが爲め却つて日本の貿易は發達しないかも知れない。新嘉坡に於ける日本の名物は、領事館員の空言壯語と淫賣出稼とである、由來日本の淫賣婦程侵略性の激烈なものはあるまい、彼等は恰かも空気の如きものだ、地球の殆んど總ての部分を満し盡さんとして居る、而して淫賣婦の行く所必ず多少の日本人が伴ふから、是を善意に解釋すると彼等は邦人發展の先驅者であるといへるし、是を惡意に解釋すれば日本帝國の體面に泥を塗るもの

であると言つても差問題はないのだ、若し前段の解釋をする人は、恐らく出稼淫賣婦に一の正業が伴つたことのないといふ重要な事實を知らない抜作であらう、吾輩は斷言する出稼淫賣婦は徹頭徹尾國家の體面を汚すものだ、文明の暗黒面には恐るべき罪惡が潜伏して居るものだ、今日世界の各方面に散亂しつつある幾萬の淫賣婦は、嚴重なる人道と法規の網の目をくゞり抜けどうして故國を去つたのであらう、是れ殆んど一種の魔術ではあるまいか、天下唯一人の多田龜吉君を罵るのは酷だ、婦女誘拐を以て正當なる營利の事業であるかの如く、國家の大法を無視して最も大膽に振舞つた彼多田龜吉の如きを出したのは、抑も社會に罪があるのだ。

閑話休題 新嘉坡とし言へば必ず日本の出稼淫賣婦を聯想する程有名な處である、吾輩は上陸すると直ぐ土人の人力車に乗つて日本人居留地に向はんとした。支那人にしても土人にしても此地方の車夫程無意識なものはあるまい、土

地不案内の悲しさ日本人居留地だと言つたつもりなのが、何でも彼でも此處へ曳込めば間違いないと思込んだ俥夫のことだから、聽てガラ／＼と轆棒を下したのが日本の淫賣窟、と見ると二町程 兩側にツラリ軒を並べたのが淫賣屋で、軒下に廿五六の大年増 蝶々鬘に赤の鹿の子を掛け、華美な浴衣を丈長に着て赤いシヨギを腰に締めた醜態は何に比べやうものもない、是でも日本人かと思ふと吾輩急に情けなくなつてきた、夕に越客を迎へ朝に吳郎を送るといふ文句は、同じながら多少の詩趣を帯びて居るが、吳郎越客どころか白人支那人印度人馬來人何でも御座れの情の切賣、夜になると總勢五百人の淫賣婦が喃々たる口説に外國人の機嫌氣襖を取らねばならぬとは、天下是程殺風景極る悲惨事があらうか!?

此事に就て思出したが新嘉坡では斯ういふことがあつた。  
香港で吾輩が若狹丸へ乗込むと吉岡といふ日本人が居たが偶然彼と相知るや

うになつた。吉岡は藥劑師であるがどういふ目的か英國倫敦へ行くと言つて居た。所が其實新嘉坡以西の旅費はなかつた。で彼は着船と共に新嘉坡へ上陸したが、何かして旅費を拵らへなければならなかつた。吾輩は香港から瀧藤君の紹介状を持つて行つたので、別に糊口に就いては些しも顧慮することはなかつたが、譯は是からである。

吉岡は藥劑師であるから多少醫術の心得がある、そこで思付たので新嘉坡に於て醫師を開業するといふことであつたのだ。が併し彼は開業免狀を所有して居る譯でないから公然看板をあげる譯に行かない、して見ると一般患者の來る道理がないから、彼は新嘉坡の女郎屋へ登樓して大法螺を吹立て、乃公は日本でも有名な醫者だなどと相敵の女郎を煙に巻いて歸つて來て、吾輩に助手になつてくれないかと頼むではないか、吾輩早速承諾に及ぶと、彼は例の白衣を着け髭を捻つて醫師になりすました。吾輩は敢て慾で吉岡醫師の助手になつた譯

ではないので、要之旅の憂晴しと一つには又暹羅渡航の機會を待ちつゝあつた時であつたから、赤道直下に於ける堪へ難い無聊を醫する爲めであつたのだ。

當時新嘉坡には牧野とかいふ日本の開業醫があつて、是が日本の淫賣婦を常患者にして居たが、先生餘り評判が面白くなかつた。處へ吉岡が駄法螺を吹立てたものだから、開業早々患者は續々と詰掛けて來る、人間といふものは妙なもので斯うなると結果が非常に好い、就中今迄梅毒で牧野醫師の治療を受けて餘り抄々しく癒らなかつた女郎が、吉岡醫師の診療を受けると効果がメキ／＼と現はれ來るといふのだから、此評判がバツと立つ、牧野醫師は門前雀羅を張るといふ孤城落日の有様だから沈黙で袖手傍觀する譯に行かなくなつたので、牧野先生は女郎屋の總親方に泣付いて、女郎が吉岡醫師の診察を受けることを斷然嚴禁すべく嘆願に及ぶと、女郎一同鶴の一聲で其儘バツタリ吉岡の所へは來なくなつた。吾輩其内に暹羅渡航の機會を捉へたので吉岡と訣れたが、彼は

其後どうしたのか吾輩が暹羅探検を終り再び新嘉坡へ歸着した時は最早其消息を聞くことを得なかつた。

快男子希くは健在なれ!

(廿七) 暹 羅 探 検

公園ロハで假騒——一人の日本人——那威汽船に薩摩守となる——  
航海中芋の皮を剥く——ケアテンゲリーソン——日本人のコーヒー店  
に泊る——稻垣公使の優遇——盤谷府——賄賂の多少で判決が左右せ  
られる

吾輩は暹羅探検を思立つたがサテ宜い便船がない、ないことはないが懷中に餘錢がないのだ、なにしろ新嘉坡上陸の際は墨西哥銀で三弗しかないといふ悲惨な状態だったから、無論新嘉坡盤谷間の船賃があるべき道理がない、行かんと欲すれば又候薩摩守にならなければならぬ、どうしたものかと新嘉坡公園

のロハ臺で腕拱いて考へ込だ、思はずあゝ翼が慾しいと叫ぶと、何時の間にか脊後に覗寄つて悪戯をたくなまんとした黒人の腕白小僧が、吾輩の聲に驚いて一目散に逃出すと、印度巡查が喫驚して椰子樹の蔭から現れた。赤道直下の眞晝間、緑蔭の影は濃い四邊の風物はウツトリとしてソヨとの風も吹かない、吾輩は考へ疲れて堪へきれない睡魔に襲はれ唯最う引着けられるやうに其儘眠つてしまつた。香港のケーブルカーに乗つて中途から落下つた夢を見てハッと思ふと目が醒めた、見れば何時の間にか吾輩の傍に日本人が一人腰を掛けて居る、ウカツに日本語で話しかけると澳門でやつたやうな失策があるから大に慎重の態度を取つてすまし込で居ると、先方から聲を掛けた、段々話して見ると此男は新嘉坡盤谷間を往復する那威汽船の料理番だと知れた。今が今として新嘉坡盤谷間に適當な便船もやと腐心しつゝあつた時だから、此男の話を聞いて暗夜に一道の光明を認めたらやうな氣持がした。どうだ船長は乗船で行つてくれ

るだらうかと訊けば、夫はどうだか解らないといふ、成程船長の心は此男に解る筈がない。

「君吾輩の爲めに無賃乗船を談判してくれ玉へ。」

「私には英語が旨く話せませんから、貴郎直接に談判つて見たらいでせう。」

此に於て吾輩は其男を拉して那威汽船に船長を訪れた。途中で料理番切りに荷物船だから承諾は困難らうと言つて暗に逃げをはつたのを無理遣りに引張つて波止場から通船を雇ふて汽船に行つた。スルト恰度在船たものだから辭を低うして便乗を依頼すると、船長は言下に快諾して呉たのでホット一息吐くことを得た。船長名はグリーンソン自分の持船ノールウエー號と共に、盤谷のウエスといふ獨逸商會に雇はれ、暹羅米を新嘉坡に輸送するのが仕事であるそうだが、齡已に六十を超へ鬚髯悉く白く頭髮半は禿げて居るが、幾十年來潮風に吹曝された顔は生々活動の色が漲つて居る、是では生中の壯者の脚下へも寄りつけ

ない、アレキサンダージュウマの冒險小説にあるケブテンバンファイルといふ人物は、多少此ケブテンゲリーソンのやうだつたらうと思ふ。

出帆は明二十五日といふので一旦暇を告げ翌朝八時出帆の間に合ふやうにやつて来て見ると、二千噸のノールウエー號は煙突から黒烟をムラ／＼と吐きつ

つあつた。飛乗つて舷梯を驅登ると船長は舷門に出迎へて

「ハロー！勇敢なる日本旅行家！」とアツ痛い！と叫びたい程手を握つた。

應て錨を抜いて新嘉坡を出港した。翌朝馬來半島を左舷に見ると同時に、右舷の方遙かに安南の陸影を眺めて航海四日、廿八日午後一時メーコン河口に達したが盤谷府迄は尙十哩餘を溯航しなければならぬ、嚴然たる河口兩岸を壁めた砲臺には守兵の影だに認めない、平和と言へば平和だが暢氣さは是でも解る、船は河口の淺洲を越し左岸に沿ふて溯航した。處が此メーコン河の河口には一孤島がある、而して其島には素晴らしい太い寺院が建立されてある、其巍

峨たる堂塔伽藍が河口一帯の平野を睥睨しつゝある態は、何とも言へない程莊嚴であるが、吾輩其時さう思つた。此寺院は最も適切なる意味に於て暹羅の佛教を標示する大看板だと、船の進むに連れ眸を放つと、熱帯附近の常として兩岸は芭蕉樹で埋まつて居る、更に又奇觀であるのはメーコン河上の家屋だ、船を二隻並べて其上に建築して居る、家根が芭蕉の葉で壁は割竹である、而して幾百千とも知れざる此等の家屋は悉く河上で商業を營んで居る、溯航するに従つて家屋は益々稠密商業は益々殷盛だ。見ると物品購求のお客様は悉く乗船だ、さうかと思ふと花見時や川開きに隅田川で見受けるウロ／＼船の如きものが各自に、菓子、果實、野菜を賣りながら河上の市街を漕ぎ廻つて居るのも面白い、日本の水上警察は船住居を嚴重く言ふが、メーコン河上の盛觀を見たら恐らく膽をつぶすであらう。

午後三時ノールウエー號はウエス商會の棧橋に着いた。吾輩は下船するに臨

みケブテン、グリーンソンに向つて滿腔の謝意を表さなければならぬ、一面の識もない絶東の一寒措大を、斯くまで丁重に斯くまで親切に待遇されやうとは、吾輩と雖も最初から豫期しなかつた。今になると航海中賄室で芋の皮剝の手傳ししなかつたことが恥しくてならぬ、吾輩は船長の手を堅く握り厚く禮を述べて立去らんとすれば、暹羅視察を終へて再び新嘉坡へ歸らるゝならば遠慮なく申出でられよ何時にても連歸らん程にと、親身も及ばぬ同情に深く深く感謝の念に打たれながら、棧橋から盤谷府の市街へ足を向けると、行手から一人の日本人が来る、公使館は何處だと訊くと、其人はフト吾輩の旅装に目を付けたやうだつたが、僕は是から自宅へ歸る處だから公使館は明日にして僕の家へ來玉へと、早や案内顔なるに三界に家のない吾輩だ孰れにしても同じことだと、打連立ちて行く程に一個のコーヒー店に入つた、是が其日本人の家で其夜は日本の土産話と興味ある暹羅談に夜の更けるのを知らなかつた。此コーヒー店の

主人姓は小崎、年の頃卅五六、鬱勃たる野心を胸の奥底深く秘めて、ひそかに機を熟するを待つて居る快男子である、吾輩は天が此活動的快男子に大なる祝福を垂れんことを祈つて止まないものである。

翌日公使館に稻垣公使を訪問した。稻垣公使は愉快なる紳士だと聞いて居たが、聞きしに違はず實に物の能く解つた好紳士であつたのは何となく嬉しかつた。吾輩は稻垣公使の優遇を受け、翌日吾輩の案内に附せられた芝間書記生と馬車を共にして市中の見物に出掛けた。

王城の周囲は城壁が繞らしてある、第一の門を入ると正門が大花園で右に内務省左に大寺院がある、第二の門をくぐると此處にも壯麗な花園があつて、其周囲は悉く寺院で圍つてある、其正面が國王の宮殿で入口は見事な御影石の階段がある、階段の兩側に象の銅像が嚴然と控へて居るのは大に振つて居る、宮殿の内部は極彩色や金箔塗で宛然佛壇の中へ入つたやうだ、宮殿の番兵は芝生

へ腰を下して雑談に耽つて居る、其不規律はお話にならない、夫はいゝとしても苟も一天萬乗の君主がいます宮殿へノコノコ入込むものゝあるさへ知らぬ顔の半兵衛を極込むとは、其暢氣さ加減も是に至つて極まれりと謂つべしだ、吾輩芝間書記生に此話をするると芝間君の言が面白い。

「其點が即ち暹羅の暹羅たる所以さ、なにしろ支那人を除くの外信用ある外國人は自由に拜觀を許すやうになつて居るんだから考へて見るとお手輕千萬な譯だよ。」  
支那人は暹羅にまで排斥されるとは宛然嘘のやうな話だ。  
諸官衙は歐風の堂々たる建築で、國王直轄のワットブラケオ寺院は輪奐の美を以て世界に鳴つた大伽藍だ、此國はさすがに佛教國だけあつて國王の御信心もさこそと察せられる、日本の佛様は田舎の愚夫愚婦の臍線金で僅かに空寂裡にポツ然とすまして御座るが、夫に比べると暹羅の佛様はお仕合せだ、犬にな



るなら大家の犬になれといふが眞實だ、日本の佛様に此事を話したら急に暹羅へ鞍替するなんかと駄々をこねだすだらうが、此點等が所謂知らぬがほとけかも知れないテ。

其日稻垣公使夫妻と晝食を共にするの榮を有した。

翌日ロイヤル公園、動物園、博物館等を見物した。公園は一國首府の公園として聊か物足らぬ心地がするが、歐米人が見て珍しがらうと思ふのは園内の竹林である、高さ三丈頗る見事なものである。

其翌日暹羅司法部顧問政尾藤吉君を訪問して同國法律の狀態を訊ねた。政尾顧問は簡單に説明して曰はく、現今法律制度は極めて發達し、裁判所の如きは地方裁判所から大審院まであるが、唯一つ此處に面白い除外例がある、外でもない國王の直裁を判で、日本でも徳川幕府の時代には能くあつた奴だ、兎に角一國の君主が親裁するといふのだから極めて嚴正公平な裁判であらねばならぬ

が、夫は單に表面の美しい名に過ぎないので、裁判長たる國王には後見が附いて居て王の意見を右左するから、賄賂の多寡に依つて判決はどうでもなる、此邊はてもなく日本の舊幕時代の裁判制度に似て居る、而して國王直裁を判の收入が年々二十五萬圓とは驚くと。

吾輩は去つてワワサンブロン寺院に佛學を研究しつゝある大槻君に就て、暹羅に於ける佛敎傳來史を叩いた。同君は病を推して吾輩の爲めに説くこと頗る詳しいものがあつたが、其中で同君は釋迦が親しく此國に巡錫布敎した傳説を否定し、暹羅へは釋迦の弟子でブツダコーサーが來たのだと言つて居られた。

(廿八) 暹羅王維納に奥帝をへこます

妾二百王子六百——國王の豪奢——黄金の食器——跣足で腰巻一枚——僧侶にかざる——動物園は猿ばかり——在留日本人の半面——食事は摘食ひだ——國王の宴會に金貨を撒く

暹羅の面積は殆んど日本に倍して居るが人口は漸く二千萬内外だ、都會と言つても首府の盤谷府だけで、他は悉く見る影もない村落に過ぎないのだ。

國王は其義妹を以て皇后として御坐る、而して其文武の百官は悉く國王の血族である、だから暹羅政府は殆んど水入らずの家庭の如きものである、吾輩が面謁した高官連の容貌は所謂瓜二つで、姓名を聞いてからでなくては其權兵衛と太郎兵衛とを區別するのは困難である、更に國王が妾二百人を蓄へ従つて王子六百人の多きに及ぶと聞いてはあきれの外はない、阿房宮を築いて三千の美女を蓄へた誰やらには及ぶべくもないが、夫にしても暹羅の國王は當世第一の色男であると同時に、君寵を争ふ二百の美人を旨く操縦してオホンとすまし込んで御坐る王の辣腕は眞に敬服の外はないではないか。

暹羅國王は世界でも有数の富豪である、従つて王居華麗を極め、樓上閣下、不斷の天樂を奏し、春風洋洋々として王又人生の愁を知らず、宮中の宴會は毎月

四回を下らないが、其都度王は皇族大官及各國の使臣を招致して其豪奢を誇るのを唯一の快樂として居るそうだが、吾輩は國王の豪奢を證明する興味ある譚を耳にした、王が先年歐洲を漫遊した時、途次維納府に埃太利皇帝を訪ふた。

帝は遠來の珍客を遇するに懇切丁寧を極めた、應て盛大なる宴會は開かれたが、此時用ひられたのが埃帝秘藏の黄金皿で帝は秘かに其豪奢を誇つて暹王の喫驚を期待された、暢氣千萬な暹王は御馳走ばかり舌鼓打つたが、肝腎の黄金皿を賞めない、埃帝も案に相違して心中甚だ憚ばなかつた、今迄朕を訪れた各國の帝王で未だ朕の黄金の食器を賞めないものはない、然るに彼東洋の貧弱國たる暹王が如何に無頓着の男とは言へ、餘りと言へば無神經ではないかと苦りきつて御坐る、此方は暹羅の王様、桃源の春深く立置めて未だ人生の秋を知らない人ときてるので、黄金皿位何でもないのだから知らぬ顔をして空嘯いて御坐る、埃帝は内々小腹で態と隆い鼻を齧めかして

「どうでげすな此黄金皿は……實は秘藏の珍器じゃで平素は用ひんが、此度陛下が來塊れたに就て貴覽にかけやうと思つて出したんじや、實は朕の自慢の食器でナ……」と言はれると暹王は

「ほほう成程……陛下の許では黄金皿が客用で……？」と不審の體。

「いかにも左様で……陛下もやはり此種の食器を御所持かな？」

「ハツハツハツハツ、陛下の許では這廢食器は平素使用つてるよ！」と暹王の痛快なる一言に、煥帝も大に赤面されたといふことである、是は兩國君主の逸事としても面白い譚だが、此一事を以ても暹羅國王の贅澤さ加減が察せらるるではないか、尤も此國に黄金の産出が豊かである譯ではないが、暹羅國人の通性として恐しく金ピカ物を好むからで、其上贅澤性が加はりさてこそ平素の食器を黄金で製へるなどといふ沒常識なことが出來するのである。

國王の蓄財は夥しいもので、英國の某銀行のみにても三百萬弗の臍線が預け

暹羅國王の蓄財の夥しき

てあるそうだ。王族連にも財産家が多い、軍人連にも日本の生中の富豪は脚下へも寄りつけないやうなのが捨てる程あるそうだ。盤谷府などは是等の富豪連の地所を無代價同様に安價く手に入れ、煉瓦造二階建の長屋を建築して貸家の札を張つたものだから、忽ちにして歐洲風の面目を備へた大都會がメーコン河岸に現出したのだ。加之國王始め王族大臣其他知名の富豪連は大抵一二度歐米を漫遊して來て居るので、其頭腦は比較的ハイカラに化つて居る、だから盤谷府の道路は悉く歐洲式で、那威人の經營にかゝる電氣鐵道會社が電燈事業を兼營してるので、盤谷府は爲めに錦上添花を添ふるの觀がある。斯の如く市街は文明の粉飾をして居るが、風俗は依然として珍無類である、跣足腰卷一枚といふのが暹羅紳士の常装である、甚だしきに至つては婦人までが殆んど是と同じくである、で口にはキンマクといふものを始終嚙んで居るから、口中からは紅の汁が滴々として下つて居る、其相好の恐しさは宛然人間の生血を吸ふ惡鬼羅刹

のやうである、而して暹羅人はキンマクを口にしなければ片時も我慢ができないといふに至つては、實に慄然として驚くの外はない、だから齒は往昔の日本婦人の夫の如く眞黒に染まつて非常に汚ないのである。  
ノールウェー號の甲板からメーコン河口の大寺院を望んで暹羅は佛教に魅入られたことを知つた吾輩も、此國では上下悉く十日なり廿日なり僧侶にならなないものはないと聞いて大に驚いてしまつた。實に暹羅に於ける佛教の勢力は豫想外である、盤谷府のみにても大寺院と稱するに足るものが十五六個所ある、而して一寺院に收容する僧侶の数が三百人に上るとは嘘のやうで事實である。日の本は岩戸神樂の太古より女ならでは夜の明けぬ國といふが、暹羅は僧侶でなければ夜も日も経たない國である、何と抹香臭い國ではないか、一寺院で三百人と見積つた處が十五ヶ寺院で僧侶の数が四千五百人に上る、是等のノラクラ坊主が食潰すだけでも随分巨額の費用を要するだらうと或人に訊くと、其人

の談話に否とよ此等の坊主は二食で其内一食は托鉢に依つて得るのだと、吾輩是を聞いて少しく意を安んじた。寒念佛の僧侶が門口に立つても頭から劍突を喰はす日本人は餘り性質が好くないが、何千人といふ絶對的不生産的の人間を假令一日一食でも養ふ盤谷府の市民こそ大慈大悲の佛性ではあるまいか、毎朝各戸飯を焚くと第一に佛前に備へ然る後入口へ備へて置く、スルト例の僧侶が譯も解らない經文を誦しながら平氣で入口の飯を持つて歸る、日本ならば此泥坊僧侶！と鐵拳の二つ三つは狂はない相場だが、暹羅の僧侶は平氣の平左衛門で寺院へ持ち歸り、留守番の僧侶に振舞い自分にも喰べるのであるそうだ。  
僧侶の服装は新舊兩派とも黄色の法衣を纏つて居る、形は日本の僧侶の着る法衣と大差はないが、日本のやうに下着に白衣は用ひないやうだ。  
暹羅佛教の新舊兩派は彼の耶蘇の新舊兩教とは全然趣を異にするもので、唯法衣の着方に少し異なる處あるのみだと聞いては、其無造作に一驚を喫するの

外はないのだ。

寺院の有名なものは、「ワツサゲット」「ワツトブラケオ」「ワツチエーン」「ワツサンブロン」「ワツトレヤープ」等である、而して此等寺院の面積は頗る廣大なもので、坊の数は數千に上るさうだ。

暹羅の軍備は全然お話にならぬ、現役兵五萬と稱すれども其實一萬五千が關の山だらう、尤も近衛兵四個聯隊、騎兵一個聯隊、砲兵一個聯隊、歩兵四個聯隊、外に山砲兵一個大隊、地方派遣の混成聯隊が四個あるとか言つては居るが、據かに信ずることは出来ないのである。海軍は二三千噸の巡洋艦が四五隻あるが、是等は單に國王及王族等の快遊船たるに過ぎないので、其乗組の將校下士卒等はゾドンと一發喰つたら、早速腰を抜す弱虫共であるのだ。

話が少し前後したが吾輩盤谷府の博物館を見て、馬より大きい鹿が居たには驚いた。又門の兩側に日本の鎧が飾付けてあるのは何となく嬉しい、館内には

種々雑多なものがあるが、長さ六尺もあらうと思はれる見事な象の牙があつた、是も慥かに日本人には珍しいに相違ないが、最一つ珍奇なものがある、外でもない虎毛の馬だ、體はさほど大きくはないが其毛が白と茶の斑紋で、吾輩も初

最は馬と虎の申子かと思つたが、猶且兩親共普通の馬であつたさうである。動物園を見たが別に珍しいものもなく、殆んど其大部分は猿ばかりで、眞赤な尻を振廻してキー／＼遊んで居た。

當時在暹の日本人は百人足らずで、職業の種類は公使館員、領事館員、鋸職、寫眞師、畫家、醫師、理髮職、コーヒー店等で、餘り大きい聲では言はれないが日本の女郎屋も二軒あつた。此女郎屋に有名なやりて婆が居るさうだ、彼女が日本を出てから最う卅年にもなるさうで、最初はおさだまりの甘い舌の上へ乗せられて日本を脱出で上海へ着くと直ぐ賣飛ばされ、其後流れ流れて盤谷府へ來たのであるが、人は呼んで上海婆といつて居るさうである。此上海婆

の其暗黒面には小説よりも奇なる事實が潜んで居るに相違ない！  
農商務省の商品陳列所は共和商會の一隅に設けられてある、陳列の方法は總て米國式で大に意を用いてある處は嬉しかつたが、番人先生の横柄なものには驚くの外はない、あれでは折角陳列所を設けても何にもならぬ、總て士族の商法では駄目だ、今に於て全然前掛主義に改めないと思ひ、恐く嗔臍の悔があるたらう、吾輩の目から見ると政府は如何にして金を捨つべきかといふ問題で非常に苦心しつゝあるやうに思はれるが、天下これほど馬鹿氣きつた話があるたらうか、吾輩其時さう思つた、稻垣公使なども國王の宴會に列席して心にもないお世辭ばかり言つて居るのが能ではないから、最少し確乎やつて貰いたいと、夫と是とは話が違うが、國王の宴會では年に一回金貨を撒くのが慣例になつて居るさうだが、稻垣公使夫人などは毎年澤山拾はれるといふことだが、是は信用にはならないのである。

暹羅政府には御備官吏の必要があるが、西洋人は給料ばかり高く比較的實績が上らぬ、是に於てどうしても日本の人材が必用だ、恰度國情が日本の維新前に似た處があるが、國王の頭腦は比較的文明的に出來上つて居るから、日本人の活動すべき餘地はいくらもあるのだ、然るに在留本邦人は悠々閑々として酒ばかり呑んで居る、酔へば愚にもつかない大言壯語をするが、公使の蔭口でもきくのが關の山で實に痛嘆に堪へない。  
盤谷府の在留商人の中には豪傑連が多くて困る、甚だしきに至つては客が脱帽しないと云つて怒鳴り散らすのさへある、國威の發揚も時と處とに依る、此邊は大に省みて貰いたいものだ。盤谷の人口四十萬と見て其過半は支那人である、従つて支那商人の商業的勢力は侮るべからざるものがある、就中日本雜貨は日本商店より支那商店の方が一割方廉價だ、夫でも日本商店は品物がいゝから高價いのだと思はれて居るだけがつけめだが、注意しないと飛んだ處で豚

尾漢の爲めに脊負投を喰うだらう！

暹羅は智識と生活の程度が低いから、日本人は極めて仕事仕易いのだ、處が暹羅へ来た日本人は實力の伴はない僻に大言壯語する、且つ事業の經營に無理をするから半年も経つと倒れてしまふ、吾輩が思ふには、海外で事業を押し始めんとする人は第一に其國の國語に熟達して貰いたい、でない店員に馬鹿にされた上誤魔化される、又金のない僻に外觀を飾つて無闇と紳士を街う、其上短氣で執着力が零ときてるから、どうも失敗する人が多いやうである。

養蠶は頗る幼稚で大抵は例の山繭だが、夫も餘り感服とするやうなものはない、取上げた絲もお籠末千萬なもので、逆も上等の織物を製織る譯には行かない、吾輩が居た當時、稻垣公使の勸誘に従ひ暹羅政府も日本から急に養蠶教師を雇備したが、其月俸は暹貨三百五十パーツ（日本貨二百十圓）であつたそうだが、斯ういふ風だから織物は實に幼稚で大抵綿物ばかりだ、美術的模様の如きは

今日尙ほ研究するものすらない状態で、支那印度方面からの輸入が僅かに其需用に應ずるばかりだ。尤も染物として黒染だけは極めて上等なものができ、僧侶が多いだけに黒染は研究されたものだ。或人は評したが、満更さういふ譯でもない。

此國の産物は米、チーキ材、胡椒等である、胡椒で思出したが暹羅の料理には何でも彼でも唐辛をウンと入れるのだから、逆も日本人には辛くて食へたものでない、我慢して食ふと鼻柱が狂がつてしまふ。

暹羅では食事に箸を用いない、悉く拇中指の三指で摘喰だ、近來上流世界の男子は大にハイカツて匙を用ゆるが、婦人だけは依然として摘喰である、姫御前のあられない其殺風景には驚くの外はないのである。

鐵道は盤谷府からクラット迄百六十二基米突、バアクアナン鐵道がメーニン河に沿ふて海岸に至る迄廿一基米突あるのみだが、當時延長計畫中であつた

が、吾輩は何故日本人が延長工事の請負をやらなにかと思つた。今迄西洋人の技師を巨額の給料を拂つて雇傭して居たのだから、日本人がやる氣ならば充分其競争に勝てやうと。

### (廿九) 山田長政の舊跡

パンバインの離宮——知事の優遇——河岸に置去らる——晝食の御馳走——知事、日本談——アユチヤに赴く——パンシツボン(日本村)——國王象狩奇談

パンバインといふ處に國王の離宮があると聞いたから序に見物しやうと思立ち、共和商會の峯君に諮ると、宜しい幸いパンバインの知事は知己だから紹介しやうと言ふので、吾輩は一日峯君の紹介を貰つて孤杖飄然と出掛けた。盤谷停車場へ行くと待合室に黒山のやうな群集がある、何事かと近づいて見ると、何國にも能くある習で今しも一個のスリが捕まつたのだ、野次馬がワイワ

イ言つて騒ぐのを査公が制止する、世界到處同じ型だ。吾輩は此騒動を外に見て驛長を訪れると不在だ、止むを得ず助役らしいのに面會してパンバイ迄の無賃乗車を談判に及ぶと、驛長が不在だから獨斷で承諾する譯に行かないと言ふ、驛長は何時頃歸るかと言くと、夫は解らないと不得要領の挨拶に一寸面會つて、どうしやうかと内々憂慮して居ると、折能く驛長がやつて來たので早速面會して、薩摩守の談判に取掛ると、驛長曰はく、貴下の勇氣と壯圖に敬意を表して無賃乗車を承諾するが、行先地はパンガイン迄で宜しいかと、此時吾輩の胸にはアユチヤに山田長政の舊跡を探らんとする野心が勃然として起つたので、アユチヤ迄行きたいと言ふと、然らだ盤谷からアユチヤ迄の往復無賃乗車を承諾しやう、途中パンバイン下車は貴下の隨意と、早速快諾してくれたので恰度コラットに向け發する列車に飛乗り馳つてパンバインに着き、知事を其邸宅に訪問して峯君の紹介状を見せると、善來々々！と非常に喜び吾輩の爲めに特



に英語を解する青年を案内に附け、平常は何人と雖も立入ることのできない處迄快よく縦覽を許された。

離宮の周圍は清冽なる泉水が繞らしてある、而して其泉水の邊りには一叢の竹林があつて、竹の高さは四丈に達して居る、橋を渡つて門を入り離宮内に至れば、老年の門番が叩頭して吾輩を室内に招じた、見ると周圍には暹羅古代の繪畫が掛連ねてあるが、孰れも戰爭畫で日本ならば騎馬武者といふ所が、暹羅だけに悉く騎象の武者である、此繪畫で見ると往時の戰爭に多く象を用ゐたことが解る、今日暹羅の國旗に象章があるのは、慥かに象其者を尊重する所以に相違ないのだ、今日でも盤谷の王城には國王が其妾に亞いで愛せらるゝ秘藏の象があるが、此象身に餘る榮華に近頃有卦に入つて居るさうである。

奥へ進むと國王の玉座がある、周圍の裝飾は何とも言へない程美しい、横手の一室には歐洲古代の繪畫及びナポレオン時代の戰爭畫がある、一通り見終つ

て庭園へ出ると、日本流に藤棚が園中の道路の日蔽になつて居る處は一寸趣がある、泉水の對岸に支那寺院風の宮殿があるが、其周圍は鳥獸及び山水の彫刻で悉く金箔が置いてある、十一時頃知事の邸宅へ歸り樓上よりメーコン河上を眺むれば、住くさ來るさの真帆片帆は津々たる詩趣を乗せて馳り、對岸の高塔は宛然吾輩を招くが如きに心動き、再び知事邸を辭してメーコン河岸に出た。見ると橋がない、洋杖を上げて河上を往復する小舟を呼んで見たが、悉く知らぬ顔をして漕去るに少々自烈度くなり、高塔見物は斷念しやうと思つて踵を返すと、行手から一個の男が來た、段々近づくとニコくしながら今日はと言ふ、突如に挨拶され喫驚して日本人かと思れば、純然たる暹羅人だが、なにしろ知らぬ外國で日本語は嬉しい、話して見たら滿更他人でもあるまいと、日本語で話し掛けると先生鳩が豆鐵砲を喰つたやうにケロリとして居る、どうも不審で堪らなかつたが、今日は一語が先生の日本語の身上だと解つて見れば可笑もあ

り、今晚はなぞと飛んでもない挨拶を喰はなかつた。いけがまだしもであつた。吾輩は此男を捉へ手真似で對岸迄渡してくれないかと言ふと、恰度其男が船頭であつたから談判は立どころに定まり、元の岸から小舟に棹し對岸へ渡り、上陸するとき例の手真似で必ず待つて居れと言捨て、聽て目指す寺院に來り高塔に登つて四方を眺むれば、河を越へたるバンバインの市街は近く脚下に横はり、遠くメーコン河畔の平野は漠として雲際に消へ、風趣絶佳、吾輩は暫し吾を忘れて恍惚とした。時計を見れば十二時、驚いて塔を驅下り河岸に來て見ると、驚いた吾輩を待つて居る筈の船頭が居ない！

自失して岸に立つて居ると前方から船を漕いで來るものがある、誰かと思つて居ると離宮拜觀の案内をした青年で、吾輩の歸りが遅いから迎いに來たのだと言ふ、然らばと其船へ飛乗り知事の邸へ歸つて見ると、中食の用意がしてあるから二階へ上り玉へと言ふので、無遠慮に食堂へ通つて見ると成程山海の珍味

が並べてある、數多の厨官等も知事と共に食卓へ就いた。最初にスープが運ばれ、續いてハムエッグが出る處なぞは知事も中々ハイカラだ、パンの代りにドライクラツカが出る、知事のいふには、此邊は田舎ですからパンがないですと、どうです飯はありませんかと訊くと飯ならいくらでもあるといふ、然らば御飯頂戴とドライクラツカの代りに飯を頬張りながら、ナイフやフォークを遣つて大に御馳走になつた。

食後談偶ま日本の事に移つた。知事は先年日本に來遊したことがあるといふので、種々當時の旅行懷舊談が出た内に、東京では黒田伯爵や鍋島侯爵に會つたことがあるが、或時黒田伯爵の催しにかゝる宴會で、列席の日本の紳士は日本服で坐し、吾々の一行は暹羅服で暹羅流の横坐りをしたが、食事も一寸似た處もあるし坐り方も殆んど同じなので、非常に愉快に酔つたことがあつた。又東海道列車の中で日本人と間違へられ日本語で語しかけられたには往生したと知

事は笑つて居た。何國に行つても夫に似た粗忽者が居ると見へ、吾輩が澳門で葡萄牙を捉へて日本語で話しかけたなぞは大に幅が利かない話だ。

其日は知事の邸宅に宿泊し、翌朝バンバインの停車場へ来て見ると、キンマクの汁を口邊からグラ／＼垂した氣味の悪い男女が雜沓して居たには思はず戰慄してしまつた。

バンバインの停車場でコラツト行の列車に乗りアエチャに着いた。此處は盤谷府を距る五十哩、暹羅の舊都で百五十年前迄は人口五十萬もあつたそうだが有名なる山田長政は此處で權威を利かしたのである、彼の事蹟は今更事々しく述立てる迄もなく、吾人の記憶には何時でも新しい、此附近にバンジツボン即ち日本村の名稱が残つて居るのが何よりの證據だ、天が若し此英傑に與ふるに十年の生命を以てしたら、彼の事業は又一段と華々しいものがあつたらうに、英魂今那邊にか迷ふ!! 玉樓金臺徒らに荒れて、アエチャの過去の榮華は今求

むべくもあらず、千載の下猶多情の人をして轉た感慨に堪へざらしむるものがある。

去つて知事を訪ひアエチャ商業の現況を訊ねた、知事曰はく、此地の商況を見んと欲せば乞ふアエチャ運河に往くと、依つて小船に賃して河上に浮べば、運河の兩岸は例の浮家屋を以て滿されて居る、河上生活も是に至つて實に痛快なものがある、見ると西洋小間物雜貨、洋反物類、其他國産日用品は言ふに及ばず、總ての商業が實に盛大だ。

暹羅國王は毎年一度アエチャ近郊の原野で象狩を催される、吾輩は其獵場を見るべく船を獵場の岸へ着けさせ上陸したが、面積殆んど廿町四面にも餘る廣とした原野で、周圍には直徑一尺もある柵が繞らしてある、正面の壯麗なる宮殿は上覽所だ。サテ象狩の期日が近づくと諸方の田舎から太く逞しい象を撰んで何十頭となく此獵場へ運んで来て放して置く、國王上覽の當日になると、

數多の獵夫が手に手に獵具を携へ是等の象を狩立てるのであるが、中には象の脚下に踏躪られて呼吸の根の止まるものや、例の長い鼻に巻かれて五間も前方へ投付けられて氣絶するもの、鋭い牙にかけられて敢なく生命を失ふものなぞがあるなぞといふ殺伐なる光景に、心あるものは殆んど正視するに忍びないやうである、然るに國王陛下は王族愛妾及文武の官僚を従がへマジくと見て御坐るぞうだ。

吾輩はアエチヤに取て返し、夕方の列車に乗つて其晩の内に盤谷府に歸つた。

### (卅) 新嘉坡歸航

火酒攻め——船長の氣煩談——三國同盟——出帆は明日だ——堂々たる英國艦隊——馬齡善攻めは恐れる——大颶風！大危険！——海員の風流

翌日ウエス商會の棧橋に横着して居るノールウエー號にケプテン、グリーン

ンを訪れて出帆の日時を問合せると、ケプテンは非常に喜んで吾輩を船長室へ引張込み、給仕に命じて火酒を持來らしめ、洋盃へなみくと注いで前へ置き「出帆は明日の朝だが、那麼ことはどうでもいゝからまあ一杯喫り玉へ。」と言ふ、船長は最う吾輩の下戸を忘れてしまつたらしい、先度の航海で火酒攻めに會つた時、吾輩は頓首再拜して白旗を船長の軍門に樹てたことがあるに、豪放磊落恰かも東洋豪傑の面影あるグリーンソン君は、最うすつかり忘れて御坐る、吾輩は頭を掻きながら下戸の宣言をすると、船長は笑ひながら

「さうだつたね、君は吾輩とはうまが合はん方だつたね、夫じやバチ、でも嚙り玉へ。」と自分ではクビリくとひツかけて居る、酔が廻るにつけて船長ソロソロ青年時代の氣焔譚を繰返し初めた。其處へ一等連轉士が陸上から歸つて來る談話が又賑になる、二等連轉士が何か訊きに來て其儘引止められ、船長から火酒攻めに會つて閉口して居る、卓上の呼鈴を押すと給仕がバントリーから

顔を出す

「晝食はお客様があるから料理番にさう言へ、一人前餘計に用意をしろツて。」  
 給仕がかしこまつて引下ると、ハイカラの二等運轉士が吾輩に油をかけ始めた、一等運轉士が相槌を打つと、鬚髯武者の船長が崩れるやうに笑ふ。夫で船長と二等運轉士が那威で一等運轉士が英國、吾輩が日本ときたから、ールウエー一號の船長室では端なく三角同盟が形成された。船長が北清事變に於ける日本軍隊の勇敢なる行動を賞めると、一等運轉士が英國と日本と同盟したら天下是程強いものなからうなぞと中々味を言ふ。正午になる、食堂で食卓を圍んで機關士が

「どうだい一等運轉士、早く新嘉坡へ歸りたからう?」と意味ありげに冷評す、冷評された方は髭を捻つてフ、ンと鼻で笑ひながら

「君じやアあるまいしよ。」とハムサラダの皿をついて居る。

しながら斯う言ふと

「是は御挨拶だね、ねえ二等運轉士さうだらう。」  
 「誰か鳥の雌雄を知らんやさ、ハ、ハ、ハ、ハ。」と二等運轉士が禁飾を一寸氣にしながら斯う言ふと

「オヤ、く！是は驚いた！」と機關士が珈琲を嗅みながら、さも驚いたといふ顔付をする、船長は

「出帆は明日だ、さうクヨクヨすることはないさ、ハツハツハツ。」言つたので意味ありげな會話は止んでしまつた。

吾輩は出帆が明日と聞いては、さう便々と油をうつても居られないので、船を出て一旦盤谷府へ歸り公使館員及び其他の知人に訣別して其日の夕方再び、ールウエー號の客となつた。

翌朝未明船は盤谷府を後にしてメーコン河を下つた。曉色微茫、淡々たる朝霧は河面及兩岸の平野を立罩め、盤谷府の堂塔、殿閣、大樓が其間より隱見

する態恰さまあだかも盛氣しんき樓ろうを見るやうな心地こころがする。メーコン河口がこうを過ぎ暹羅灣シヤム湾に乗出すと、提督ていとくブリッヂ中將ちゆうじやうの座乗ざじやうする旗艦きかんグロリー號がうを始め英國艦隊えいこくかんたいの雄姿ゆうしを河口がこうに浮うかべて居る、ノールウェー號がうは船尾せんびの國旗こくきを半下はんかし此等艦艦これらもつたうの前面ぜんめんを通過つうくわした。商船しやうせんは軍艦ぐんかんに對し國旗こくきを半下はんかして敬意けいいを表すべきことになつて居るので、本船ほんせんでは此規定ここのきていに従したがつて英國艦隊えいこくかんたいに敬意けいいを表したのだ、スルト英艦隊えいこくかんたいでも悉く軍艦旗ぐんかんきを半下はんかして答禮たふれいした。どうも商船しやうせんは割わりが悪い、何故なぜかといふと燈臺とうだい近傍きんぱうを通過つうくわするときは、燈臺とうだいに向つて敬禮けいれいしなければならぬ、夫それは夜道よみちを照して貰ふのだから恩義おんぎはあるが、軍艦ぐんかんは同じく燈臺とうだいのお蔭かげを被かりながら豪然ごうぜんとして燈臺とうだいに頭あたまを下げさせて居る、商船對燈臺しやうせんたいとうだい及軍艦ぐんかんの關係くわんけいは恰度ちやうど封建時代けんけんじだいの町人ちやうじんの頭あたまが上らないのと一般おなじである。

ノールウェー號がうの荷脚にあしは重いおもい、潮しほはよし風かぜはよし、滑すべるやうに暹羅灣シヤム湾を下かした。

吾輩われらは料理室れんりしつへ入つて馬齡薯皮剝ばにんせいかはせきの手傳てのたひを始めた。最初はじめは旨うまく剝むけなかつたが段々だんだん慣れるにつれて巧手じゆうずになる、盤谷パンコックを出て二日間ふたつかんの晝食ちゆうじきに出た馬齡薯ばにんせつは大抵たいてい吾輩われらが剝むいたのだ、食事しょくじの時とき此話このはなしをすると船長せんぢやうが

「夫それでは中村君なかつらくんに此儘船このままふねの料理番れんりばんになつて貰もらふかな。」といふと、口くちの悪い二等運轉士じゆうせんしが

「船長夫せんぢやうは困却こんけつるですよ。」といふ。

「何故なぜ？」

「だつて船長せんぢやう、中村君なかつらくんが料理番れんりばんになると吾々われらは馬齡薯攻ばにんせつこうめに遇あふでせう！」

「成程馬齡薯攻なるほどじやうがしもせめは恐おそれるね。」と船長せんぢやうは笑わらふ。

「そうでせう、だから中村君なかつらくんはどうしてもお客様きやくさまでならんけりやならんです。」

とハイカラの二等運轉士じゆうせんしは氣取ききどつた調子てうしで言いつた。

「ハツハツハツ、夫それじゃ中村君明日なかつらくんあしたから料理番れんりばんの手傳てのたひは止とし玉たまへ。」と平常餘ふだんあまり

辯らない事務長までが話の仲間入をする、船は今渺漫たる沖中に出た。  
午前からドンヨリと曇つた空は時々雨を催し、濕乎とした空氣は宛然蒸されるやうに暑い、日暮時になると、空は何とも形容のできない程氣味の悪い雲で閉ぢこめられ、殊に西の方天の一角に現はれた卵黄色の雲は大異變の豫言でもあるかの如く、ソヨとの風もないのに寄せては返す長濤は山のやう、船橋に出て来た船長の顔は憂愁の雲に掩はれた、日頃の快活にも似ず、無言の儘で熟乎と晴雨計を見つめた時は、何の事か解らなかつたが吾輩も襲はれるやうに一種恐怖の念が湧いて来た。

一等運轉士も空を眺めて是もたゞならぬ面持、非番の二等運轉士までが船橋に上つて来て

「何だか大に變ですなア。」と言つて船長の顔色を覗がつた。

「ウム！」と言つたさきり船長は、晴雨計と空模様を見比べて居る、舵手が

羅針盤を見ては舵輪を廻しながら、氣遣はしさうに船長や一等運轉士の顔をぬすむやうに見る、突如として船長は斯う言つた。

「一等運轉士！ 愈々来るせ晴雨計が餘程下降つた、荒天準備をさせて呉玉

へ！」一等運轉士は水夫長を呼んで何か命令すると、忽ち水夫等が一生懸命で

活動し始めた。甲板客の支那人が狼狽する。

船長は何事か運轉上の注意を與へて船長室に降りてしまつた。

「どうかしたんですか、一等運轉士？」と訊いて見ると彼は態と平氣を装ふて

「何有大丈夫だよ！ 少し位吹くかも知れないがね……」と言ふ顔の色が沈み

きつて居た。

夜になると沛然たる驟雨が甲板を突破るやうに降出した。風が吹く！

翌拂曉、吹くワ！ 降るワ！

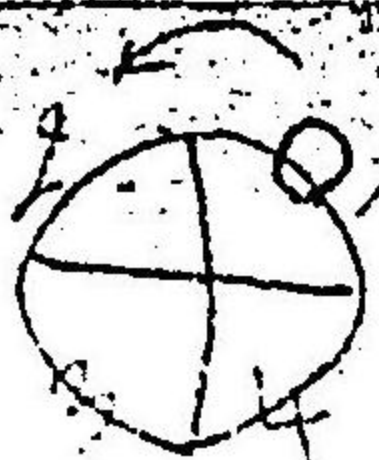
ノールウエー號は山なす怒濤に吞まれんとした。

百千の銀河を一時に傾け盡したやうな猛雨を伴ふ大颶風！ 是がどうして現世の單なる空氣の流動的現象と思はれやう！

阿修羅の叫喚だ！ 魔王の怒號だ！

ノールウエー號は忽ちにして虚空、忽ちにして千仞の奈落、船首を噛んで碎くが如き波浪の餘勢は前甲板を打越へてゲルンフォクスルは時ならぬ潮の瀧津瀬、雨合羽に身を固めて船橋に立て居る船長連轉士は、舷に激する怒濤の飛沫を被つて全然濡鼠のやうになつて居る、恐いもの見たさに昇降口から顔を出す、と此有様、驚いて駆け降りやうとした途端、船が一搖り揺れると吾輩は足場を失つて下甲板へスツテンコロリ！

下甲板には甲板客の支那人がウン／＼呻つて居る、加之彼等は抵小間物店を出して居る、呻吟と惡臭に混じてオイ／＼と泣聲まで聞へる、此慘憺たる光景の間に、馬來人や印度人の水夫が裸足の儘で鼻歌うたいながら働く態は



一種の奇觀だ。

颶風を轟々の響は夜になつて又一段と激烈くなつた。

當直から降りた一等連轉士がグツシヨリと濡れて食堂へ入つて來た。

「どうだい颶風の中心を遠ざかつたかい？」と椅子へしがみ付いた事務長が問ふた。

「今右半圓の前象眼にあるよ、中心は遠ざかりつゝあるがね、なにしろ

どうも酷いからなア。」

「船長相變らず船橋に居るかい？」

「朝から下らずよ、船長も卅年來の大時化だと言つて居た。」

途端！ 舷外ではどんな大きな浪波が襲來したのであらう、左舷を側を打碎くやうな響がしたと思ふ間もあらず、船は左舷に著しく傾いて椅子に倚つた三人はコロリと甲板に轉がつた、此時吾輩は慥かに轉覆するとまで思つた。



恐怖と憂慮とに生ける心地もなかつた夜は明けたが、幸いにも船は中心を遠かり晴雨計も上昇しかけたのでホット一息吐いたものゝ、是が爲のノールウエー一號は機關に故障を起し、新嘉坡へ入港したのが豫定期日より三日後だったので、ウエス商會の支店では沈没したのではないかと非常に氣遣つたさうである、吾輩船員でないものでも彼程の大時化を旨く切抜けなつかしい港へ錨を投込だ時は實に何とも言へない程嬉しかった。況して巨萬の財寶と幾多の生靈を托された船長以下船員の苦心は並大抵ではないのだ。

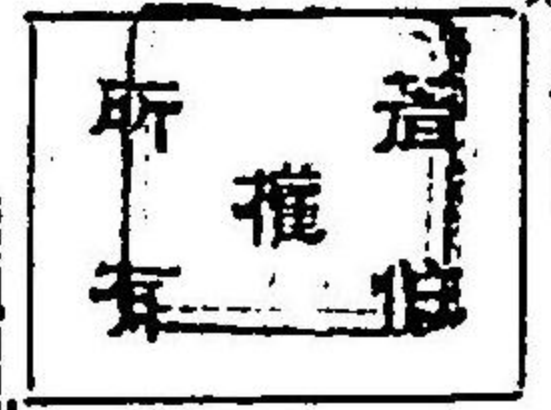
陸影が見へる！ 入港する！ 錨を投込む！ 誰か海員の風流を嘲るものぞ！ 吾輩は船長其他に乗船中の厚意を謝し、新嘉坡に上陸したが、更に新銳の元氣を振つて双の鐵脚に爪哇、スマトラ、ビルマ、印度の山河を踏破らんとす。

五大洲探檢記 卷之一亞細亞大陸橫行終

明治四十一年八月廿五日印刷  
 明治四十一年八月廿八日發行

定價金四拾五錢

五大洲探檢記 第一卷 附圖



編者 中村直吉  
 編者 押川春浪  
 發行者 大橋新太郎  
 印刷者 市川七作

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

刷印所刷印館文博  
 東京市小石川區久堅町百〇八番地

主筆 押川春浪君

# 冒險世界

毎月壹回 五日發行 外に臨時増刊  
四六倍判 每號紙數百二十八頁 油絵三色版一頁並に普通寫眞  
版四頁挿入

▲冒險世界は何人が讀んで

愉快で堪らぬ雑誌です!!!

▲冒險世界は奮闘的健兒の友である

▲冒險世界の口繪は珍奇美麗で

▲冒險世界には每號金牌銀牌の

▲冒險世界は魔の箱の様だ

▲冒險世界は不思議なものが出る!!!

▲冒險世界は魔の箱の様だ

▲冒險世界は魔の箱の様だ

▲冒險世界は魔の箱の様だ

▲冒險世界は魔の箱の様だ

正價 壹冊金拾五錢 前郵稅 三冊金四拾七錢五厘  
郵稅金壹錢五厘 金(共) 六冊金九拾四錢  
●三冊金壹圓八拾參錢

發兌元 東京市本區橋本町三丁目 日博文館

江見水蔭君著

## 地底探檢記

文壇の驍將たる著者は他面に於て學術界の奴隸たるを辭せず。自ら大變勇を揮ひて、前人未知の地底探檢を行ひ、三千年前の太古遺跡に先史時代の住民が保留したる石器土器等を採集し、以て人類學の研究に好個の參考物を提供せり。其暗黒界より取出したる發掘品の鹿の骨あり、驚くべき大土器あり、鋭利なる内には人骨あり、鯨骨あり、海獸の牙あり、武器あり、其遺物に就ては幾々坪井博士の研究に委れて未だ發掘の奇絶なる有様を直本に記し、其地底大發掘の案内記として迎ふ見ると、他に考古的旅行者の案内記として迎ふるに足りぬべし。

新著 大變勇 全一冊

洋裝中判美本口繪三色版  
紙數五百五十頁  
正價金五拾錢郵稅八錢

江見水蔭君著

## 捕鯨船

全一冊 洋裝中判  
寫眞版四頁 挿畫十數個  
紙數三百三十五頁  
正價金四拾錢郵稅金六錢

○紙數二百頁實況寫眞版挿入  
正價金參拾五錢郵稅金六錢

「卷中目次」▲日本海の沈黙▲暗夜韓國に入る▲出漁の前日▲捕鯨記(ニコライ丸にて)▲鯨の解剖(蔚山にて)▲韓人の二三(奇異なる社會の一端)▲相撲と鯨歌▲鯨撃の名人(レックス號傾乘)▲蔚山の日▲鯨の油▲月峰寺▲鯨組▲女一人▲歸航記▲渡韓前記▲大冒險▲蔚山行

行發館文博



●英雄 小説 新日本島

○押川春浪君著

●英雄 小説 武俠の日本

全一冊 袖珍美本  
正價金四拾錢 郵税金六錢

【口繪】新造軍艦の沈没

本書は著者押川春浪君が一大傑作なり、帝國新造軍艦の沈没は東洋の大波瀾なり日英露佛米比の英雄美人兇漢刺客は五大洲の活舞臺に勇躍す東方侵略艦隊の横行海底軍艦の行衛大西郷の再生露國猛將の情死比律賓獨立軍の苦戰變勇俠客の奇珍西洋鬼ヶ島の悲劇空中軍艦の出現等讀去讀來骨鳴り肉動き熱血進ル眞に愛國男子必讀の快絶著書なり。

●海島塔中の怪

全一冊 袖珍美本  
正價金廿五錢 郵税金六錢

探險 海島塔中の怪、瀋洲の嶺、黒面島あり、冤賊之れに棲み、海洋に隠現して冤道を行ひ宇内を震駭す、會々二俠士あり、海星丸に就して此海島に入る幽靈門を侵し冤窟を衝きて可憐の處女を海底の牢獄より救ひたる、其奇其怪、開卷一番讀者既に冤境にあるの感あらん。

●傳奇 小説 銀山王

全一冊 袖珍美本  
正價金卅錢 郵税金六錢

本書は日本に比稀なる傳奇小説なり、銀山王とは何ぞぞ白雲塔とは何ぞぞ絶世の美人大宮深窟術師妖女排小僧離島隱者長髮美少年等種々の人物が海に陸に變幻奇異の活劇を演ずる物語は讀者も一驚を喫し一喜一憂巻を捲ふ能はざるべし

●海國冒險 新造軍艦

全一冊 袖珍美本  
正價金卅錢 郵税金六錢

【口繪】支那海の悲劇  
本書は海底軍艦に似て更に結構の雄大なる海國冒險小説なり、新造軍艦「うねび」の行衛不明は世界の最大疑問、支那海の混荒き所何物か潛む、南洋貿易船の出没、露國軍事探偵の隠見、冒險奇傑の快擧等、眞に破天荒の珍事にして、又破天荒の快著也。

●海島冒險 海底軍艦

全一冊 袖珍美本  
正價金卅錢 郵税金六錢

全世界を舞臺とせる奇々怪々なる大冒險譚は現はれたり、本編の主人公は雄風凛々たる日本海軍士官！其部下には慍慍決死の水兵あり、鰐魚は印度洋に眠り、獅子は大陸の巖を噛み、海賊銀を舞はす處美人跳梁する處神州快男子の鐵拳飛ぶ、紅顔の美少年あり變幻の輕艇に乗じて千尋の海底を駛る洒落の壯士あり奇異の鐵車を進めて萬峰の頂を踰ゆ寂寞たる孤島に不思議の響あり、人外の異響に大日本帝國軍艦旗躍る、奇絶！快絶！又壯絶！

發兌元 東京 博文館  
發兌元 本町 博文館  
發兌元 東京 文武堂  
發兌元 神田 文武堂



幸田露伴君著 ● 露伴叢書 全一冊洋裝大判特製 紙數千八百九十頁 正價金貳圓五拾錢 小包料金拾六錢

泉鏡花君著 ● 換葉篇 全一冊洋裝新形特製 紙數三百頁 正價金六拾錢

外十四名新作 ● 依絲軒主人著 ● 社主義新小説 文明の大破壊 全一冊洋裝大判並製 紙數四百五十四頁 正價金四拾錢

樋口一葉女史著 ● 一葉全集 全一冊洋裝大判並製 紙數四百八十六頁 正價金四拾錢

文學士 ● 沙翁物語十種 全一冊洋裝中判並製 紙數三百頁 正價金四拾五錢

小松月陵君著 ● 家庭ひとりぼっち 全一冊洋裝中判特製 紙數三百七十頁 正價金六拾五錢

河井道子共譯 ● 小公子 全一冊洋裝大判並製 紙數三百七十四頁 正價金參拾五錢

辻村靖子史譯述 ● 絕島漂流記 全一冊洋裝大判並製 紙數四百九十八頁 正價金四拾錢

若松賤子女史譯述 ● 高橋光威君譯述 ●

五大洲探險家 中村直吉君著

南米に行け

發行 東京神田南 神保町拾番

南米協會 發賣 東京 本町博文館

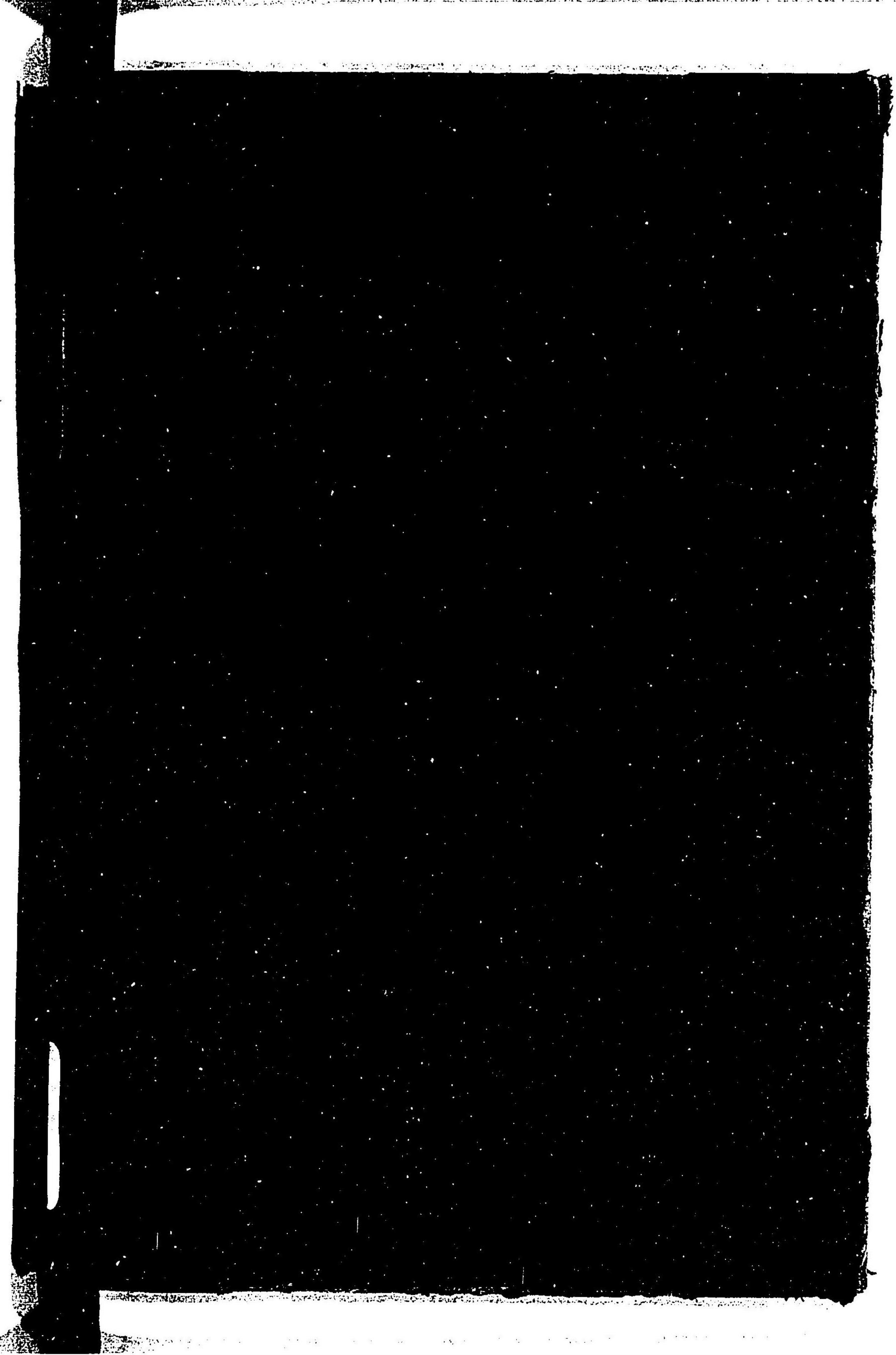
本書は著者が南米跋渉の財袋、苟も南米渡航を欲する者及事情を知らんとするの士は活眼を開きて此の南米案内を見よ！

▲最新地圖附帶 定價四拾錢 郵稅貳錢

發兌元 東京 本町博文館

95
74

88



95

74

021935-001-4

95-74

五大洲探險記

中村 直吉、押川 春浪／編

M41-45

ADA-0167





